

北筒系土器の変遷と展開

萩野 はな

要旨

縄文中期末～後期初頭における道東の土器型式として認識されている北筒式土器は、これまでその細分や編年研究が道東内の資料を中心に数多くおこなわれてきた。しかし、北筒式の一部に相当する土器群は道央や道北でも出土していたため、北筒式の全体像を理解するためには道東内に限られた議論から脱却し、道内における土器系統の広がりやそれらの影響関係を捉えることが重要である。従来、北筒式の細分型式とされてきた各土器群は、諸属性を見直すと、ひとつの系統上に位置づけられる。そこで、本稿ではそれらの土器群に相当するトコロ6類、トコロ5類、細岡式、羅臼式、丸松Ⅰ式、丸松Ⅱ式を北筒（式）系土器という土器系統で捉え、その時空間的な広がりを明らかにすることを目指した。

まず、北筒系土器が最も多く出土している道東において、その分類と編年をおこなった結果、前半期には道東内で斉一性がみとめられるが、後半期になると2系統に分化し、道東内で地域差を有しながら展開していくことが判明した。また道東以外では、道央でトコロ6類、道北でトコロ6類・トコロ5類・細岡式・羅臼式に相当する土器群がみとめられることも分かった。本稿では、北筒系土器を新たに4つの段階に区分した。それぞれ、第1段階はトコロ6類、第2段階はトコロ5類・細岡式、第3段階は羅臼式と丸松Ⅰ式、第4段階は丸松Ⅱ式に相当する土器群の展開していた時期を指す。各段階における分布をまとめると、道央・道北・道東と広範囲に展開していた第1段階から、徐々に道東へと縮小していく様相が再確認できた。北筒系の成立に関しては、道東のモコト式からの直接的な系統変遷は考えにくい。一方、道北や道央にはそれぞれ北筒系の系譜がみとめられる土器群があるため、道東以外で北筒系土器が出現した可能性を指摘した。今後、道央を中心に展開する余市系土器などの他系統土器との関係性を明らかにすることで、北筒系土器を東北日本全体における編年の枠組みの中に位置づけることができるようになるだろう。

1. はじめに

北筒式土器は、縄文中期～後期の北海道の道東¹⁾を中心に展開していた土器型式のひとつであり、北海道式円筒土器（名取 1939；北構 1939 など）の略である。縄文時代の道東は北海道内でも他地域と比較して厳しい気候環境や文化の固有な文化をもつ地域として捉えられる側面がある（藤本 1979）。このような道東の特殊な地域性をふまえ、北筒式の編年研究は、道央南の土器との比較・検討がほとんどおこなわれずに進められてきた。北筒式土器は、道東に限らず、道北や道央においても出土している。しかし、これまでの北筒式の編年研究は、道東内の資料を主な対象としており、道北や道央の土器型式との並行関係に関する詳細な議論は少ない。そこで、本稿では従来の北筒式土器を北筒（式）系土器として捉え直し、その時間的・空間的な広がりを再整理することを目指した。

2. 研究の前提

2-1. 研究略史

北筒式は「北海道の東北部で発達した圓筒土器の地方型」（河野 1935:527 頁）として名付けられてから、

多くの細分・編年研究がなされてきた。その基礎となっているのが、澤による細分案（澤・河野 1962）であり、型式学的な特徴によって分類されたⅠ式～Ⅴ式は現在も北筒式の細分や編年に用いられている名称である²⁾。その他にも各調査によって得られた資料から、観音山式（大場 1961, 1962）、トコロ6類・トコロ5類・羅臼式（駒井編 1963）という型式名が設定されてきた。

北筒式は当初、道南の円筒上層式との類似性から縄文中期とする見解（加藤 1963；桑原 1966, 1969；澤 1969, 1987；藤本 1981 など）が一般的であった。そのような中、大沼（1981）は縄文中期～後期初頭における道央と道南の編年対比をおこなうことで、トコロ6類を含む澤による北筒Ⅱ式（澤・河野 1962）を中期末、北筒Ⅲ式・同Ⅳ式を後期初頭においた編年案を示した。このように、1980年代には編年の大枠は把握されており、道央・道南との並行関係や時間的位置づけに関する議論も始まっていた。

以上の編年研究を包括的に見直したのが、豊原（1996）による「北筒式土器の型式認識について」の研究である。北筒式の細分型式にみとめられる認識の混乱を解消するために、細岡式と丸松式を新たに設定

し、トコロ6類(古)→トコロ6類(新)→トコロ5類→細岡式(北筒ⅢA・桑原四群)→羅臼式(北筒ⅢB・桑原五群)→丸松式という編年案を提示した。

その後も、トコロ5類や丸松式の再検討(森2006)や観音山式の再検討(市川2018)などのように、編年の整理や再検討が注目された。編年の大枠に関しては、澤による北筒Ⅱ式～Ⅴ式(澤・河野1962)から大きな変更点はみとめられないが、新資料を加えたうえでより精査された編年案が提示されてきた。

さらに、2000年以降は、放射性炭素年代の測定事例の増加により、暦年較正年代の検討も増加している(村本2009; 広田ほか編2019など)。近年は大泰司(2020)によって、縄文中期～後期初頭における全道的な編年の構築もなされた。後期初頭までの編年であるため、北筒式に関してはトコロ6類とトコロ5類までしか対象とされていないが、北筒式成立期までの全道的な編年としては最も大系的で、東北北部などの編年とも対比可能なものである。

2-2. 研究の方法

このように北筒式土器の研究は、土器群の細分や編年研究が中心におこなわれてきたが、その多くが道東内に限られた議論であった。そのような中、近年増加している広域編年の整理は、型式間交渉や地域間関係を検討していく上で重要な課題である。しかし、その前提として、各地域で展開している土器系統の時空間的な変遷を捉えることが求められる。そこで、本研究では今村(2006)の指す土器「系統」を継承し、従来の北筒式土器をひとつの系統という概念で捉え直した。今村(同上)が土器「型式」を「系統の束」と説明するように、型式は系統の上位階層に位置づけられる。しかし、「北筒式」という呼称されてきた研究史を考慮し、本稿では、北筒(式)系土器という名称を用いる(以下では混乱を避けるため、「北筒系土器」と記載する)。当該期の道東では、北筒系以外の他系統土器がほとんど展開しないと考えられるが、道央や道北などでは他系統土器との共存がみとめられる。したがって、北筒系土器の時間的・空間的な広がりを捉え直すことで、他地域の土器系統との比較が可能となり、より広域な議論にもつながるだろう。

周知のとおり、北筒系土器は道東で最も多く出土している。そこで、まずは道東に地域を絞って、土器系統の変遷と編年を整理することが有効である。北筒系土器は層位的に出土している事例が少なく、細分型式の前後関係を確認することが難しいという問題点もあるが、包括的な分析から時間的な関係性の明確化も目指した。また、北筒系土器は道央や道北でも確認され

ているため、道東の土器との比較をおこない、その空間的な広がりを検討した。

本研究は道東を中心に、道央と道北を対象とする。道東に関しては、知床山地から大雪山に連なる脊梁山脈を境界にわけられる、気候が異なるオホーツク海側と、太平洋側の地域(福田2018)とに二分した。さらに、道東オホーツク海側においては、十勝川流域や釧路川流域に遺跡の分布が集中していたため、両者の間にある白糠丘陵を境に二つの地域に区分した。本稿では、西側を十勝地域、東側を根釧地域と呼称する。なお、本稿で言及する遺跡の所在地は図1に示した³⁾。

3. 道東における北筒系土器

3-1. 北筒系土器の分類

3-1-1. 口縁部文様帯による分類

道東では北筒系土器に他系統土器の共存する事例がほとんどないため、ここでは北筒系土器の時期区分をおこなうことで、道東における編年を検討する。まずは、土器の文様帯に注目し、その系統変遷を追うことで北筒系土器の分類をおこなう。北筒式の場合、分類の基準となる要素が口縁部文様帯に集中しているため、細分をおこなうには口縁部文様帯を構成する文様要素に注目することが重要となる。ここで注目する文様要素は、口縁部肥厚帯の断面形状、刺突文の位置と形状、突起や下垂帯の形状と単位数である(図2)。

まず、口縁部肥厚帯はその有無や断面形状で分類できる。断面形状は三角形、長方形、その中間的な丸みを帯びた三角形に大別した。

続いては、刺突文の有無、位置や形状である。北筒系土器のO I⁴⁾刺突文は器面をめぐるように施されるが、その位置によって分類することができる。ここでは、森(2006)が丸松式の分類の際に使用した「刺突文列a」と「刺突文列b」の名称を継承し、刺突文の位置を示す名称として、北筒系全体に当てはめる。前者は口縁部肥厚帯上もしくはそれに相当する位置の刺突文列、後者は口縁部肥厚帯直下の刺突文列を指す。また、刺突文の形状には、棒状や竹管状の工具を水平に刺突することで施される円形刺突文と、下方から上方に向かって斜めに刺突する、もしくは水平方向に刺突した後に施文具を下に押し倒すことで施される「茅沼型刺突文」(豊原ほか2005:22頁)とがある。茅沼型刺突文は刺突文列bのみにみとめられ、刺突文列aには存在しない。

最後は、口縁部の山形突起や下垂帯の形態とそれらの単位数である。山形突起が付される箇所が立体的に隆起し、それが下垂帯の役割を果たしている場合と、縦位の棒状隆起が下垂帯となる場合との二者がみとめられる。また、後者の下垂帯となる縦位の棒状隆起が

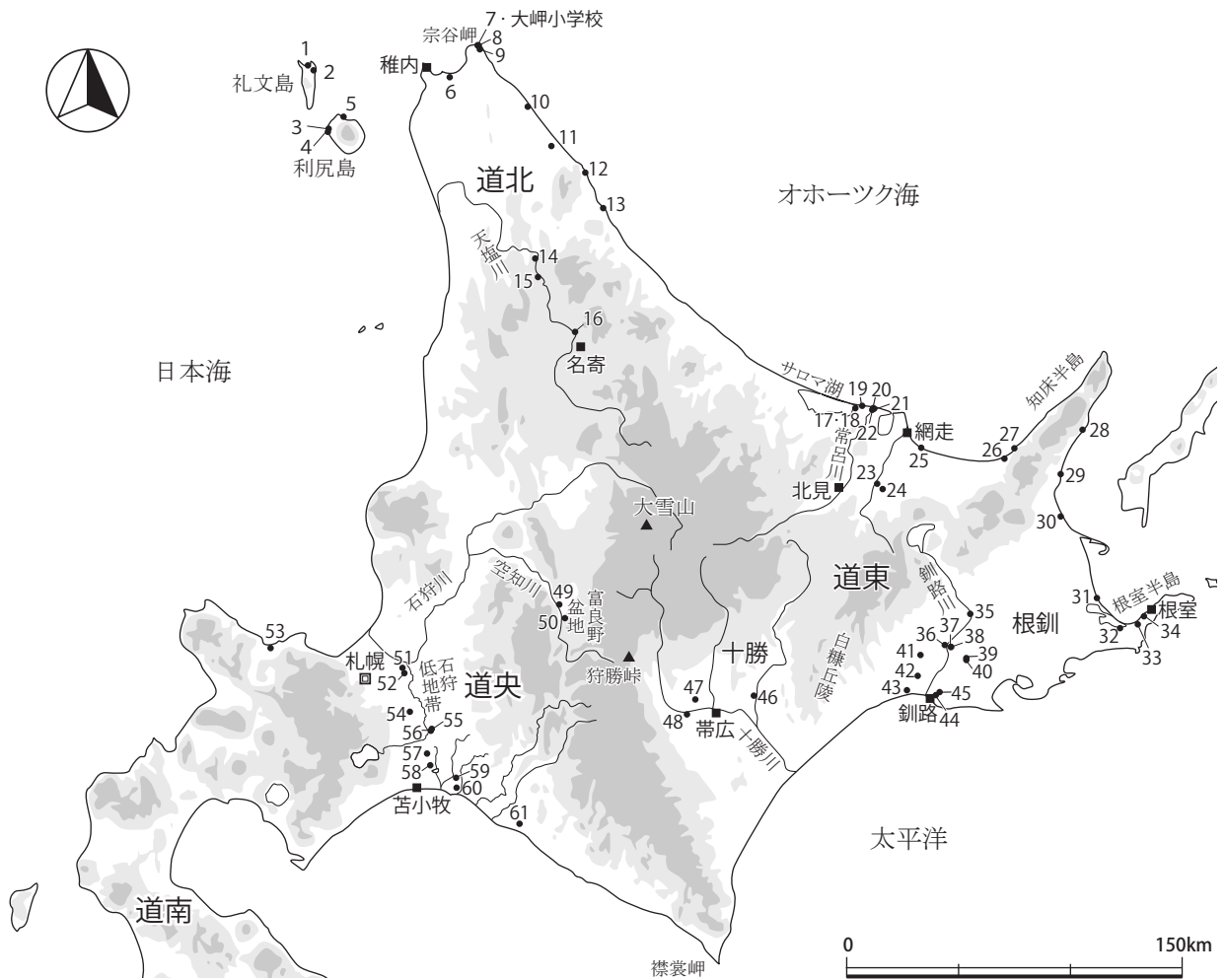


図 1 本稿で言及する遺跡

- | | | | |
|--------------------|---------------------------|-------------------------|--------------------|
| 1. 船泊 (礼文町) | 17. 岐阜第三 (北見市) | 31. 浜別海 (別海町) | 47. 北明 1 (芽室町) |
| 2. 上泊 3 (礼文町) | 18. 岐阜第二 (北見市) | 32. 別当賀一番沢川 (根室市) | 48. 小林 (芽室町) |
| 3. 種富町第 1 (利尻町) | 19. 柴浦第二 (北見市) | 33. 温根沼 2 (根室市) | 49. 無頭川 (富良野市) |
| 4. 亦稚 (利尻町) | 20. 常呂川河口 (北見市) | 34. 穂香川右岸 (根室市) | 50. 南扇山 (富良野市) |
| 5. 港町 1 (利尻富士町) | 21. トコロチャシ跡 (北見市) | 35. 西村 (標茶町) | 51. 小島の沢 (江別市) |
| 6. 恵北 1 (稚内市) | 22. トコロ貝塚 (北見市) | 36. 久著呂林道 第 2 地点 (標茶町) | 52. 萩ヶ岡 (江別市) |
| 7. オニキリベツ貝塚 (稚内市) | 23. 元町 3 (美幌町) | 37. 茅沼 第 2 地点 (標茶町) | 53. フゴッペ貝塚 (余市町) |
| 8. オニキリベツ 2 (稚内市) | 24. ピラオツマッコウマナイチャシ跡 (美幌町) | 38. 茅沼 第 5 地点 (標茶町) | 54. 中島松 5 (恵庭市) |
| 9. 豊岩 5 (稚内市) | 25. ナヨロの沢 (網走市) | 39. トマンベツ北 第 2 地点 (標茶町) | 55. チブニー 2 (千歳市) |
| 10. 浜猿払 (猿払村) | 26. 峰浜 8 線 (斜里町) | 40. トマンベツ (標茶町) | 56. オルイカ 2 (千歳市) |
| 11. クッチャロ湖畔 (浜頓別町) | 27. オライネコタン 3 (斜里町) | 41. 下幌呂 1 (鶴居村) | 57. 美沢 2 (苫小牧市) |
| 12. ヤマウス (枝幸町) | 28. チトライ川北岸 (羅臼町) | 42. 北斗 第 8 地点 (釧路市) | 58. タブコブ (苫小牧市) |
| 13. ホロベツ右岸段丘 (枝幸町) | 29. 植別川 (羅臼町) | 43. 大楽毛 1 (釧路市) | 59. 静川 (苫小牧市) |
| 14. 咲来 2 (音威子府村) | 30. イチャニチシネ第 1 竖穴群 (標津町) | 44. 東釧路貝塚 (釧路市) | 60. 厚真 1 (厚真町) |
| 15. 楠 (美深町) | | 45. 天寧 1 (釧路町) | 61. エサンヌップ 2 (日高市) |
| 16. 智東 2 (名寄市) | | 46. 十日川 5 (池田町) | |

口唇部にまで及ぶことで、山形突起のような形態を示すこともある。口縁部の上面観は下垂帯によって分割されており、最小で 4、最大で 16 の単位数となる。ただし、下垂帯がみとめられない土器もあり、そのような土器に関しては、単位をもたないものとする。

3-1-2. 北筒系土器の分類

以下では、口縁部文様帯の変遷に主眼をおき、補足

的に地文やその他の文様要素に注目することで、道東における北筒系土器を 6 つの土器群に分類した(表 1、図 3)。各土器群の名称は大沼(1989)や豊原(1996)の細分案にならい、一般的に用いられているトコロ 6 類、トコロ 5 類、細岡式、羅臼式、丸松 I 式、丸松 II 式とした。しかし、ここでは型式学的に分類した土器群の名称として取り扱い、それぞれの時間的な位置づけに関しては次節で各事例をもとに検討し直す。

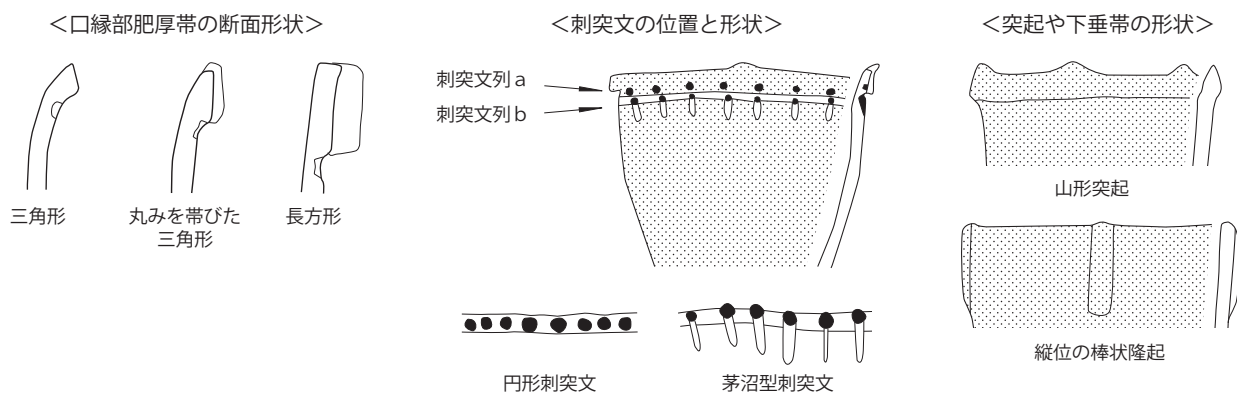


図2 注目する文様要素

表1 編年案の対比と口縁部文様帯の変遷

土器群の名称	澤・河野 1962	桑原 1966	大沼 1989	豊原 1996	口縁部肥厚帯の断面形状	刺突文の位置と形状	突起や下垂帯の形態と単位数
トコロ6類	北筒Ⅱ式	第三群	北筒Ⅱ式 (トコロ6類)	トコロ6類 古・新	断面：三角形が大半、ないものも少数	刺突文列 b (円形刺突文)	山形突起 単位：4～16
トコロ5類			北筒Ⅱ式 (トコロ5類)	トコロ5類	断面：丸みを帯びた三角形や長方形	刺突文列 b (円形刺突文) ※肥厚帯の幅広化によって施文位置の低下	山形突起 (棒状隆起によるもの)、棒状隆起単位：4～8
細岡式	北筒Ⅲ式	第四群	北筒Ⅲ A 式	細岡式 (北筒Ⅲ A)	断面：長方形	刺突文列 b (円形刺突文と茅沼型刺突文)	山形突起 (棒状隆起によるもの)、棒状隆起単位：4～8
羅白式		第五群	北筒Ⅲ B 式 (羅白式・観音山式)	羅白式 (北筒Ⅲ B)	基本的になし	基本的になし (羅白型刺突文)	山形突起 (棒状隆起によるもの)、棒状隆起単位：4
丸松Ⅰ式	北筒Ⅳ式	第六群	北筒Ⅳ式 (丸松Ⅰ式)	丸松式	ありとなし	刺突文列 a (円形刺突文) と刺突文列 b (茅沼型刺突文)	山形突起 (棒状隆起 (断面長方形と三角形) によるもの)、棒状隆起単位：4
丸松Ⅱ式	北筒Ⅴ式				第七群	北筒Ⅴ式 (丸松Ⅱ式)	なし

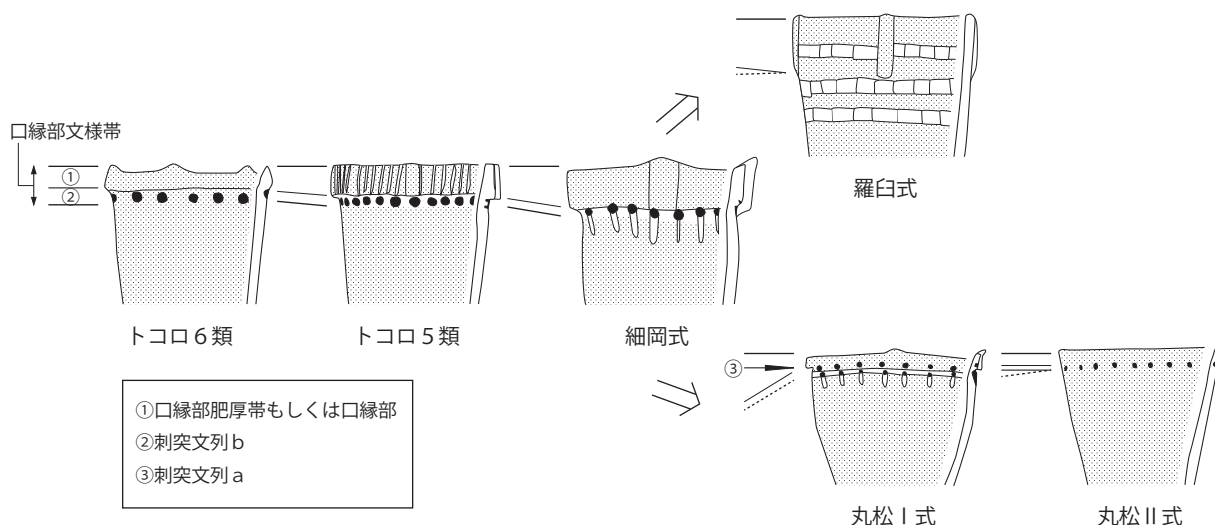


図3 口縁部文様帯の変遷模式図

トコロ6類 (図4-1~4)

口縁部肥厚帯は断面三角形のものが大半を占めており、その直下に円形刺突文が施される。口縁部にはおおよそ4~16個の山形突起⁵⁾があり、その頂部にあたる箇所⁶⁾の口唇部に棒状工具や竹管状工具の先端を深く押し込んだ刺突が施される場合もある。ヘラ状工具や棒状工具などによる押引文が口縁部肥厚帯を横走、または円形刺突文直下から垂下する土器群(図4-1・2)、地文のみの土器群(図4-3)、口縁部肥厚帯上に縦位の刻目文や沈線が施される土器群(図4-4)が存在する。これらはそれぞれ、「栄浦第2遺跡東端貝塚」、「トコロ貝塚トコロ6類」、「チトライ川北岸トコロ6類」(工藤2008)と呼称されている土器群に相当する。地文は斜行縄文や結節第1種の羽状縄文が主体である。器形は筒形であるが、胴部にくびれをもつものもある。胎土には多量の植物繊維が含まれることが多い。

本土器群は従来の北筒Ⅱ式土器(澤・河野1962)の一部、トコロ6類(藤本1980a, 1981)に相当する。

トコロ5類 (図4-5~8)

口縁部肥厚帯は断面形状が丸みを帯びた三角形をなし、三角形から長方形へと変化する過渡期にあたると思われる。トコロ6類より口縁部肥厚帯の幅が広くなり、円形刺突文の施文位置が相対的に低くなる。円形刺突文は直径約1cm以上の大きな竹管状の施文具によるものが多い。縦位の刻目や沈線が口縁部肥厚帯や胴部の下部にめぐり、これも特徴である。円形刺突文直下に縦位沈線が施され、茅沼型刺突文を思わせる個体もみとめられている(図4-8)。口縁部の下垂帯は、縦位の棒状隆起が4個のものが一般的である。地文は条が整然と並ぶ斜行縄文や羽状縄文となり、結束をもつものは稀である。単節縄文と複節縄文を組み合わせた原体による羽状縄文も存在する。器形は直線的な胴部をもつ筒形となる。胎土に多量の砂が含まれる場合が多い。

本土器群は北筒Ⅱ式土器(澤・河野1962)の一部、トコロ貝塚出土のトコロ5類土器(駒井編1963)に相当する。

細岡式 (図4-9~13)

幅広の断面長方形を呈した口縁部肥厚帯があり、その上には下垂帯となる縦位棒状隆起が4個貼り付けられる。これらの肥厚帯や下垂帯により口縁部の器壁が極厚となった結果、口唇部が幅広で平らになるものが多い。刺突文に関しては、棒状工具や竹管状工具を器面に対して直角に刺突することで施される通常の円形刺突文に加え、下方から上方に向かって斜めに刺突する、もしくは水平方向に刺突した後に施文具を下に押し倒すことで施される茅沼型刺突文(図4-11~13)

が多くみとめられる。刺突文が施される口縁部肥厚帯直下には基本的に地文が施されず、無文帯が形成される。それ以外の口唇部、口縁部、胴部には複節の斜行縄文や羽状縄文が施される。器形は直線的に伸びる胴部をもつ円筒形であるが、口縁部がやや開き気味になるものも存在する。

本土器群は北筒Ⅲ式土器(澤・河野1962)の一部に相当する。

羅臼式 (図5-14~18)

細岡式まで顕著であった口縁部肥厚帯はほとんどみとめられなくなるが、下垂帯の縦位棒状隆起は残るものが多い。下垂帯上には縄の側面押圧文が施される。口縁部から胴部にかけての無文帯が一般化し、その形態により二分することができる。一つ目は、口縁部の下に幅広の無文帯(大半は5cm前後)が横環し、その無文帯の中に縄の側面押圧文や竹管状工具による円形刺突文が施される一群である(図5-14~17)。また二つ目は、口縁部から胴部にかけて数条の無文帯がおおよそ等間隔に配置され、その上に縄の側面押圧文やヘラ状工具による刺突文を縦方向に施したり、無文帯自体をヘラ状工具の押し引きによって施したりする一群である(図5-18)。図5-17などの事例から前者から後者への変遷過程が示唆されるため、口縁部下に幅広の無文帯が横環する一群を古段階、口縁部から胴部に数条の無文帯が配置される一群を新段階とした。地文は新古両段階とも、複節の斜行縄文が主体となる。胴部に少し丸みを持ち、口縁部が垂直方向に立ち上がる器形と、胴部から口縁部に向かって直線的に広がる器形のものがある。

本土器群は北筒Ⅲ式土器(澤・河野1962)の一部、観音山式(大場1961, 1962など)や羅臼式(駒井編1963など)などと呼称されてきた土器群に相当する。

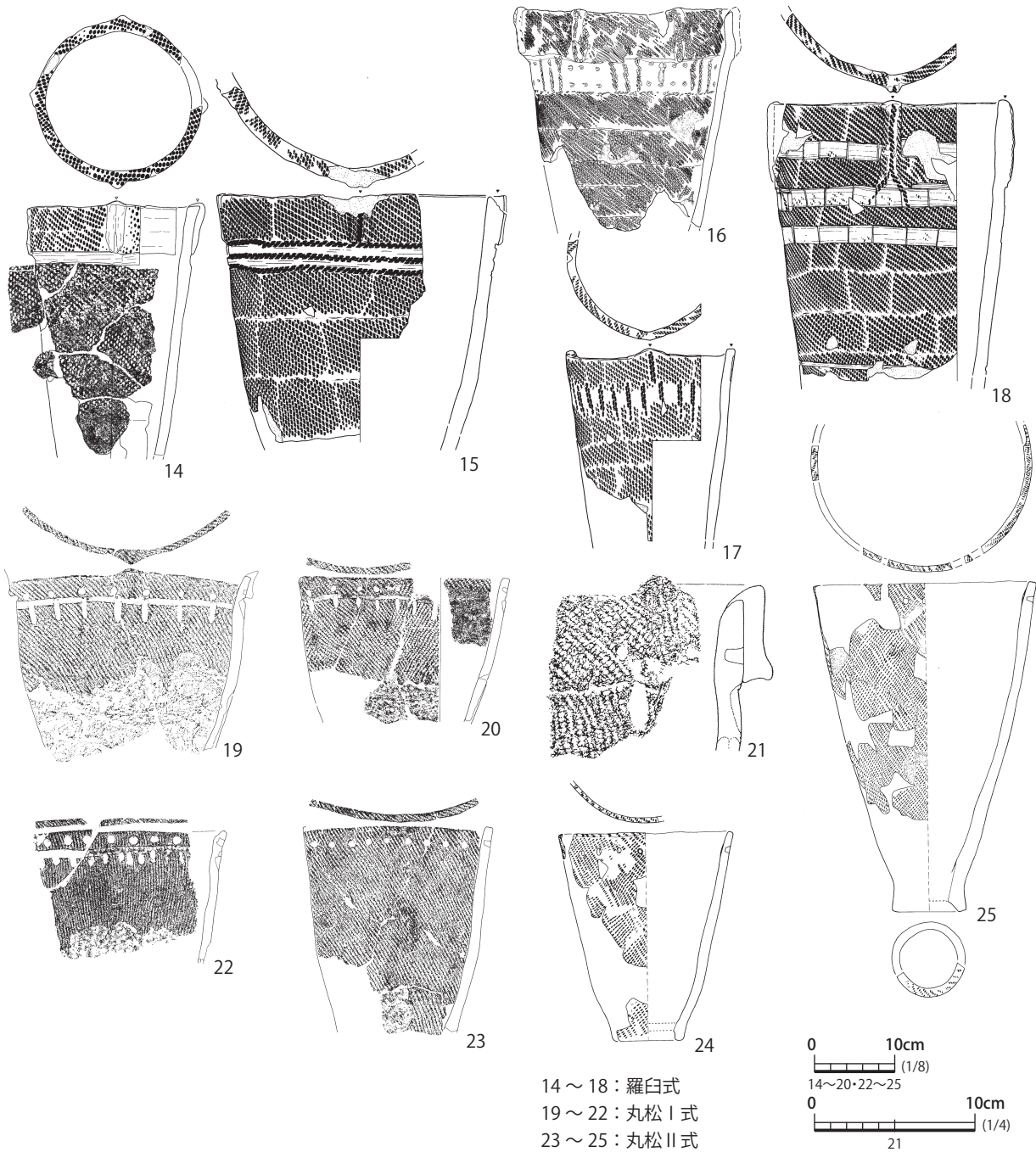
丸松Ⅰ式 (図5-19~22)

細岡式の系統上に位置づけられるが、羅臼式とは別系統であると考えられる。つまり、細岡式の後に北筒式系は分化するということである(図3)。口縁部文様帯は肥厚帯、もしくはその存在を意識したかのように口縁部と胴部を沈線で区画したものとに区分することができる。円形刺突文は細岡式までに見られた肥厚帯直下に加え、肥厚帯上あるいはそれに相当する位置にもめぐり、肥厚帯直下の円形刺突文は茅沼型刺突文である。下垂帯はあるものとなないものが混在するが、後続する丸松Ⅱ式ではなくなることから、縦位の棒状隆起をもたないものの方が新しく位置づけられる可能性がある。地文としては、斜行縄文や縦走縄文、縦位の羽状縄文である「丸松型羽状縄文」(森2006:13頁)が施される。胴部に丸みを持ち、底部にかけてすぼまり、上げ底の底部が増加する。



図4 道東における北筒系土器 (1)

1・4 : チトライ川北岸、2・3 : トコロ貝塚、5・12 : 天寧1、6 : 常呂川河口、
7・8・13 : 大楽毛1、9 : ピラオツマッコウマナイチャシ跡、10・11 : オライネコタン3



14～18：羅臼式
19～22：丸松Ⅰ式
23～25：丸松Ⅱ式

図5 道東における北筒系土器(2)

14：温根沼2、15・17・18～20・23：天寧1、16：峰浜8線、21・22：北斗第8地点、24・25：北明1

本土器群は従来の北筒Ⅳ式土器(澤・河野 1962)や丸松式Ⅰ類(森 2006)に相当する。

丸松Ⅱ式(図5-23～25)

本土器群は丸松Ⅰ式の系統上に位置づけられる。丸松Ⅰ式まで存在した口縁部肥厚帯やそれに相当する区画はなく、口縁部には円形刺突文のみが付される。口唇直下に円形刺突文がみられる場合と、口縁部のより低い位置に茅沼型刺突文がみられる場合とがある。これらはそれぞれ丸松Ⅰ式の特徴である2段の刺突文列のどちらか一方が残った二つのパターンであると考

えられる。地文は斜行縄文が主体であるが、やや縦走気味の回転縄文が施文されている場合もある。器形は丸松Ⅰ式に類似するが、底部のすぼまりが強くなる傾向がある。

本土器群は、北筒Ⅴ式土器(澤・河野 1962)、森(2006)による丸松式Ⅱ類と同Ⅲ類に相当する。

3-2. 北筒系土器の編年

3-2-1. トコロ6類の細分

本稿でトコロ6類とした土器群は、さらに細分で

きることが指摘されている。標識遺跡の朝日トコロ貝塚（駒井編 1963）出土第 6 類土器の特徴は、「胎土に多量の繊維を含む。口縁には断面が三角形の肥厚帯がありその上に 4～10 個の山形突起をもつものが多い。地文には単節の斜行縄文または羽状縄文が施されている」、「縄文以外の文様としては、先端の平らなへら状の施文具を、器面にひきずりながら連続して刺突した文様が、口縁部肥厚帯上には横の方向に、胴部上には縦の方向に施した例がある」（駒井編 1963：165 頁）とされている。その後、藤本（1980a）は「栄浦第二遺跡東端の貝塚」から出土した土器がトコロ 6 類土器のやや古い時期に相当する可能性を指摘し、「口唇近くから胴部上半にかけて、水平、もしくは垂直に施される中空の円形施文具による突引文・連続刺突文のある」土器を「トコロ 6 類（古）」、そのような文様が見られないものを「トコロ 6 類（新）」と二つに細分している（藤本 1981：138 頁）。一方、大沼（1989）は栄浦第二遺跡東端貝塚の土器群をトコロ貝塚のトコロ 6 類に後続させた考えを提示し、トコロ 5 類に類似する羅臼町チトライ川北岸遺跡（豊原・涌坂 1985）出土土器を新しい時期に位置づけた 3 区分案を提示した。

ところで、このような細分はトコロ 6 類内の時間的な変遷を示していたのだろうか。ここでトコロ貝塚の出土土器をみると、押引文や刺突文が施されたものとそれらのないものとが混在して同一貝層から出土している。一方、別海町浜別海遺跡（北構・岩崎編 1972）20 号竪穴床面では、沈線文が施された新しい様相をもつ土器群と地文のみの土器群とが相伴している。このような事例から、地文のみの土器群は、口縁部肥厚帯上に押引文や刺突文の施された土器群と沈線文の施された土器群との間に位置づけられるものではなく、両者と並行していた可能性がある。地文のみのトコロ 6 類土器の大半が単独で出土せず、口縁部肥厚帯上に押引文や刺突文の施された土器、もしくは沈線文の施された土器と同一の包含層から出土していることも、地文のみのトコロ 6 類がひとつの段階を有していなかったことによるかもしれない。

また、鶴居村下幌呂 1 遺跡（佐藤ほか編 2012）の平地住居跡 H-26 からは、口唇部や口縁部肥厚帯に「刻み目」文がめぐる土器（図 6 - 2）が出土している。この口縁部肥厚帯上の「刻み目」文は、系統的には押引文や刺突文と沈線文との間に位置づけられる文様である。下幌呂 1 遺跡以外での類例はないが、トコロ 6 類で口縁部肥厚帯上の押引文や刺突文が沈線文へと変化し、それがトコロ 5 類で主体的な文様要素となった可能性もあるだろう。このように、文様の系統関係をみても地文のみの土器群を抽出してひとつの段階を設



図 6 下幌呂 1 遺跡 H-26 出土土器

定することはできないだろう。押引文や刺突文の施された土器群と沈線文が施された土器群との関係についても、系統的な変遷を追うことはできるが、時間的に分かれていたことを示す十分な根拠がない。そこで、ここでは前者を古い様相をもつトコロ 6 類、後者を新しい様相をもつトコロ 6 類とするが、明確な段階区分はおこなわない。

3-2-2. トコロ 5 類の取り扱い

トコロ貝塚（駒井編 1963）で第 6 類土器が出土した貝層の上層から出土した土器群（図 7）を標識とするトコロ 5 類には、二つの問題点が指摘されている（豊原 1996、森 2006）。一つ目は、トコロ 5 類が設定されて以来、その型式内容が誤認されていた点である。このことに関しては、豊原（1996）が細岡式を設定することで型式内容が整理され、問題が解決されたといえるだろう。二つ目は、トコロ貝塚の調査で報告されている第 5 類土器が非常に少ない点である。報告書で提示された第 5 類土器は 19 点のみである上、実際にトコロ 5 類として認定することができる土器は図 7 - 16～19 を除く 15 点のみである（森 2006）⁶⁾。層的にはトコロ 6 類土器と分かれて出土しているが、少量しか出土していないため、ひとつの型式として認定することができるのか、と疑問視されてきたのである。このことに関しては、未だに明確な結論が出ておらず、トコロ 5 類という型式が当然のように使用されている。

ここで、トコロ 5 類がひとつの型式として成り立つのか、型式学的な側面と遺跡における出土状況から検討してみる。近年、トコロ貝塚第 5 類土器に類似する

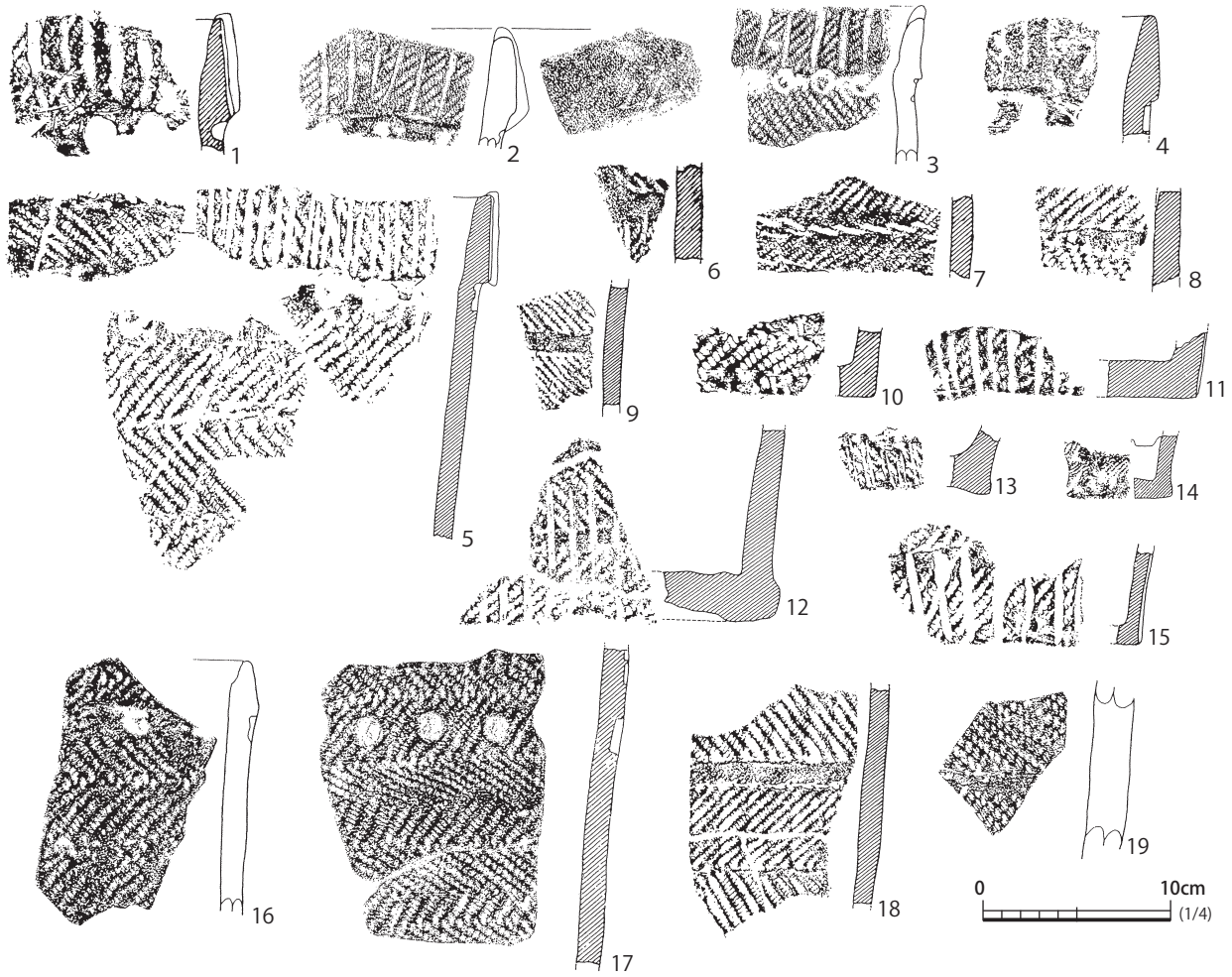


図7 トコロ貝塚出土の第5類土器

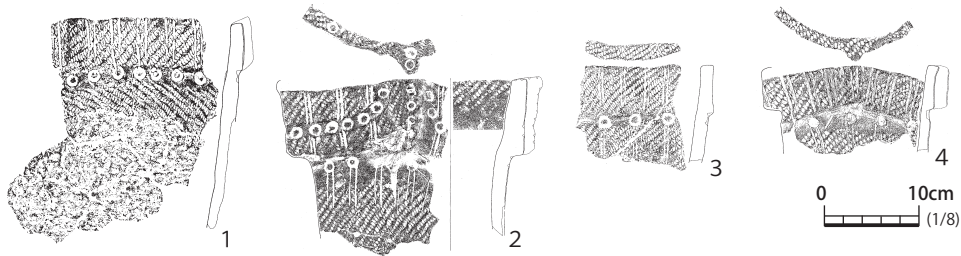


図8 トコロ5類と細岡式の間のような様相をもつ土器 (天寧1遺跡)

資料は増加しており、その特徴が明らかになりつつある。主な特徴として、丸みを帯びた断面三角形で幅広の口縁部肥厚帯とその上に施される縦位の棒状隆起、口縁部肥厚帯上と底部直上にめぐる縦位の沈線文、単節縄文の地文などがある。これらの特徴はトコロ6類と細岡式との間の過渡期的な様相を示し、トコロ6類→トコロ5類→細岡式という変遷は型式学的に連続的であることがわかる。新しい様相をもつトコロ6類とトコロ5類に関しては、共に口縁部肥厚帯上に沈線文をもつ点に類似性がみとめられるが、前者は山形突起、後者は縦位の棒状隆起があることで、型式学的に区分することができる。一方、トコロ5類と細岡式に関し

ては、その区分が難しい資料が報告されている。釧路町天寧1遺跡（工藤ほか編 2008）では、トコロ5類の特徴である単節の回転縄文による地文と口縁部肥厚帯上の沈線文をもつが、肥厚帯の幅が広く、断面形状が角張った長方形を呈することから細岡式にも比定可能な土器群が出土している（図8）。このように、トコロ5類は細岡式と型式学的に近接した関係にある。北筒系の各土器群に関しては、単純遺跡であると確言できる事例がほとんどなく、トコロ5類や細岡式においても同様である。特にトコロ5類においては、共伴関係はみとめられないものの、遺跡の同一包含層からトコロ6類や細岡式と共に出土することが多い。ま

た、トコロ5類と細岡式の分布域が大きく変わらないことも注目される。

以上で取り上げた明確に区分することが難しい土器群の存在や、これまでの調査による遺跡出土状況から検討すると、トコロ5類と細岡式を二つの段階に区分することは難しい。これまでの編年研究（桑原1966、大沼1989、豊原1996など）では、北筒式の細分型は澤による細分（澤・河野1962）との対応関係が重要視され、トコロ6類とトコロ5類は北筒Ⅱ式、細岡式と羅臼式は北筒Ⅲ式に対応させられてきた。それ故、トコロ5類と細岡式が同時期に展開していた可能性について指摘されなかったのではないだろうか。本稿ではトコロ5類と細岡式をまとめ、ひとつの段階として取り扱う。しかし、型式学的にトコロ5類は古い様相、細岡式は新しい様相をもつことから多少の時間差は存在した可能性もあるため、後に提示する編年表では併記せずにひとつの段階内で上下に配置する。

3-2-3. 細岡式と羅臼式の分類

ここでは、一般的に細岡式、羅臼式と呼称されている土器群の中間的様相をもつ土器群に関して、その分類と位置づけとを考察する。北筒Ⅲ式（澤・河野1962）を「北筒ⅢA」（細岡式）と「北筒ⅢB」（羅臼式）の二つに分類し、細岡式を設定した豊原（1996）は、細岡式（北筒ⅢA）の特徴として、口縁部の肥厚帯と縦位の棒状隆起、肥厚帯直下の円形刺突文（稀にない）をあげている。羅臼式（北筒ⅢB）については、口縁部肥厚帯がなく、口縁部から胴部にかけてヘラ状の施文具や縄文原体の押し引きによる1～数条の無文帯（その中に「縦位、横位、X、ハ形状」の縄文原体押圧文を施す例もある）がめぐることを特徴としている。以上の型式内容に関する説明や網走川流域の羅臼式土器に関する検討結果（豊原ほか2005）を参照する限り、細岡式と羅臼式は基本的に口縁部肥厚帯、円形刺突文や無文帯の有無によって分類できると考えられる。しかし実際には、以下に取り上げるような例外的な土器も存在し、豊原も当初から「AとBの中間あるいは漸移形態などとぼかさざるをえない土器」（豊原1996：43頁）している。

このような中間的様相をもつ土器群は、細岡式の特徴である口縁部肥厚帯や刺突文列と羅臼式に特徴的な幅広無文帯などの各属性に注目することで以下の3つに分類できる。

- ① 口縁部肥厚帯があり、刺突文列がないもの（図9-1～3）
- ② 口縁部肥厚帯がなく、刺突文列があるもの（図9-4～10）

③ 口縁部肥厚帯、幅広無文帯とその上の刺突文列・縄文原体押圧文・ヘラ状工具による刺突文があるもの（図9-11～16）

上記②については現状の資料を見る限り、円形刺突文と茅沼型刺突文が施されているため、肥厚帯をもたないが細岡式の範疇に含まれると考えられる。一方、③に関しては、細岡式に特徴的な口縁部肥厚帯や刺突文列があるが、羅臼式のみでみとめられる縄文原体押圧文やヘラ状工具があるため、羅臼式に分類できるだろう。なお、刺突文列がある羅臼式の類例が少数あることは、豊原（1996）も指摘している。ここで、羅臼式の刺突文列をみると、それは細岡式の円形刺突文や茅沼型刺突文と異なり、口縁部肥厚帯直下の幅広無文帯上に竹管状工具の先端を軽く押し込んだ刺突が2段構成をなしていることがわかる。以下では、このような羅臼式の刺突文を仮に「羅臼型刺突文」とし、その他の円形刺突文や茅沼型刺突文から区別する。なお①に関しては、細岡式と羅臼式の判断が難しい。細岡式には基本的に口縁部肥厚帯直下の刺突文列があるが、それが無い個体も存在する。一方、羅臼式に関しても、口縁部肥厚帯がないものが一般的だが、③のようにそれがあつた土器もみとめられる。さらに、③のように羅臼式にも羅臼型刺突文がある土器が存在することから、刺突文列がないことを根拠に羅臼式に分類することもできない。口縁部肥厚帯直下の幅広無文帯の有無で①を細岡式ないし羅臼式に分類できるかもしれないが、「幅広」の定義にも検討の余地がある。①の類例を細岡式と羅臼式の中間型式に設定している例（宇田川・熊木編2001）もあるが、類例が少なく、現状ではひとつの段階を有する土器群として捉えることは難しいだろう。

以上、細岡式と羅臼式の中間的な様相をもつ土器群の分類について検討した。しかし、このような中間的な様相をもつ土器群によって、細岡式から羅臼式への明確な変遷過程を説明することは難しい。それは、細岡式に特徴的な口縁部肥厚帯と刺突文列が同時に消滅するわけではないからである。しかし、羅臼式への移行期には、それ以前の北筒系土器の主要な文様要素が欠落することに加え、前段階となる細岡式が分布していた十勝平野などで見られなくなるなど、大きな変化が目立つ。このように、現在の資料を見る限り、細岡式から羅臼式への移行期は、道東内の様相が大きく変化していた時期としても注目される。

3-2-4. 羅臼式と丸松式の関係

以上でみてきたトコロ6類、トコロ5類・細岡式の段階に関しては、道東内での地域差はなく斉一性がみとめられる。しかし、その後の羅臼式や丸松式の段階

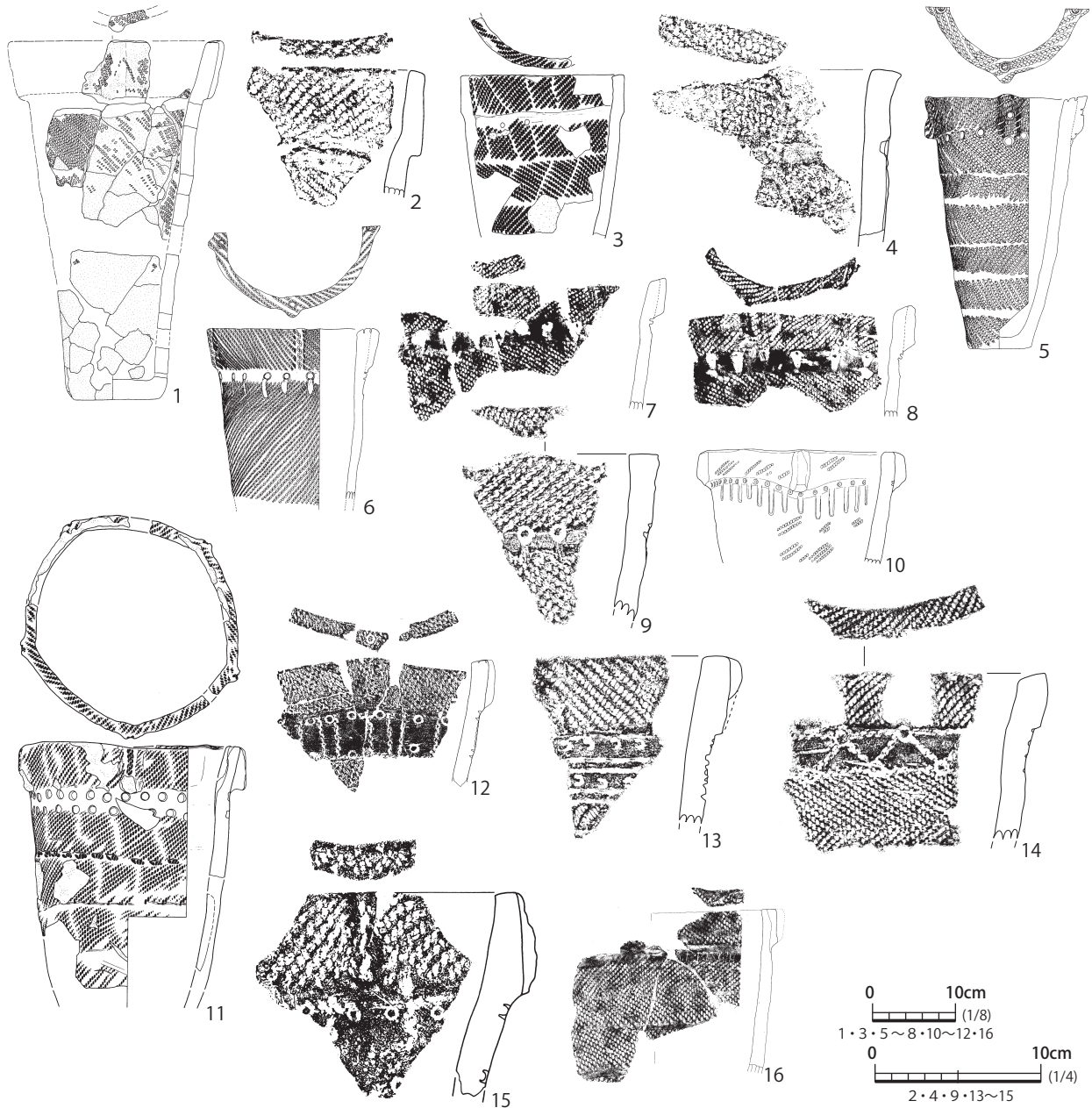


図9 細岡式と羅臼式の中間的様相をもつ土器群

1：大楽毛1、2：トコロチャン跡、3・4：穂香川右岸、5・6：茅沼第5地点、
7・8：茅沼第2地点、9：栄浦第二、10：イチャニチシネ第1竪穴群、
11・12：天寧1、13・14：常呂川河口、15：下幌呂1、16：西村

はオホーツク海側と太平洋側の十勝地域、根釧地域の間で地域差が生じる。そこで、各地域の編年とその並行関係を検討する必要がある。

羅臼式の細分

羅臼式については、オホーツク海側と根釧地域での分布が確認されており、十勝地域での分布は確認されていない。近年、羅臼式（豊原編年北筒式ⅢB）とされてきた土器型式内容の再検討により、羅臼式の中から傍系統である観音山式が抽出できると指摘されている（市川 2018）。前述のとおり、筆者も文様形態の違いから羅臼式を古段階と新段階に細分したが、各土器群は同一系統に属すると考えている。

ここで、釧路町天寧1遺跡（工藤ほか編 2008）の資料をみると、1条の幅広無文帯をもつ羅臼式古段階（図 10- 1～6）と、数条の無文帯をもつ羅臼式新段階（図 10- 7～12）とがある。羅臼式古段階の無文帯上には、羅臼型刺突文や縄の側面押圧が施されている。一方、羅臼式新段階の無文帯上には、縄文原体押圧文が施されている土器（図 10- 7～9）と無文帯自体がへら状工具の押し引きによって形成されている土器（図 10- 10～12）とがある。そのような中、幅広の無文帯に縦位の縄文原体押圧文が施されたもの（図 10- 6）や無文帯の上下を縁取るように縄の側面押圧文が施されたもの（図 10- 9）があり、羅臼式古段階

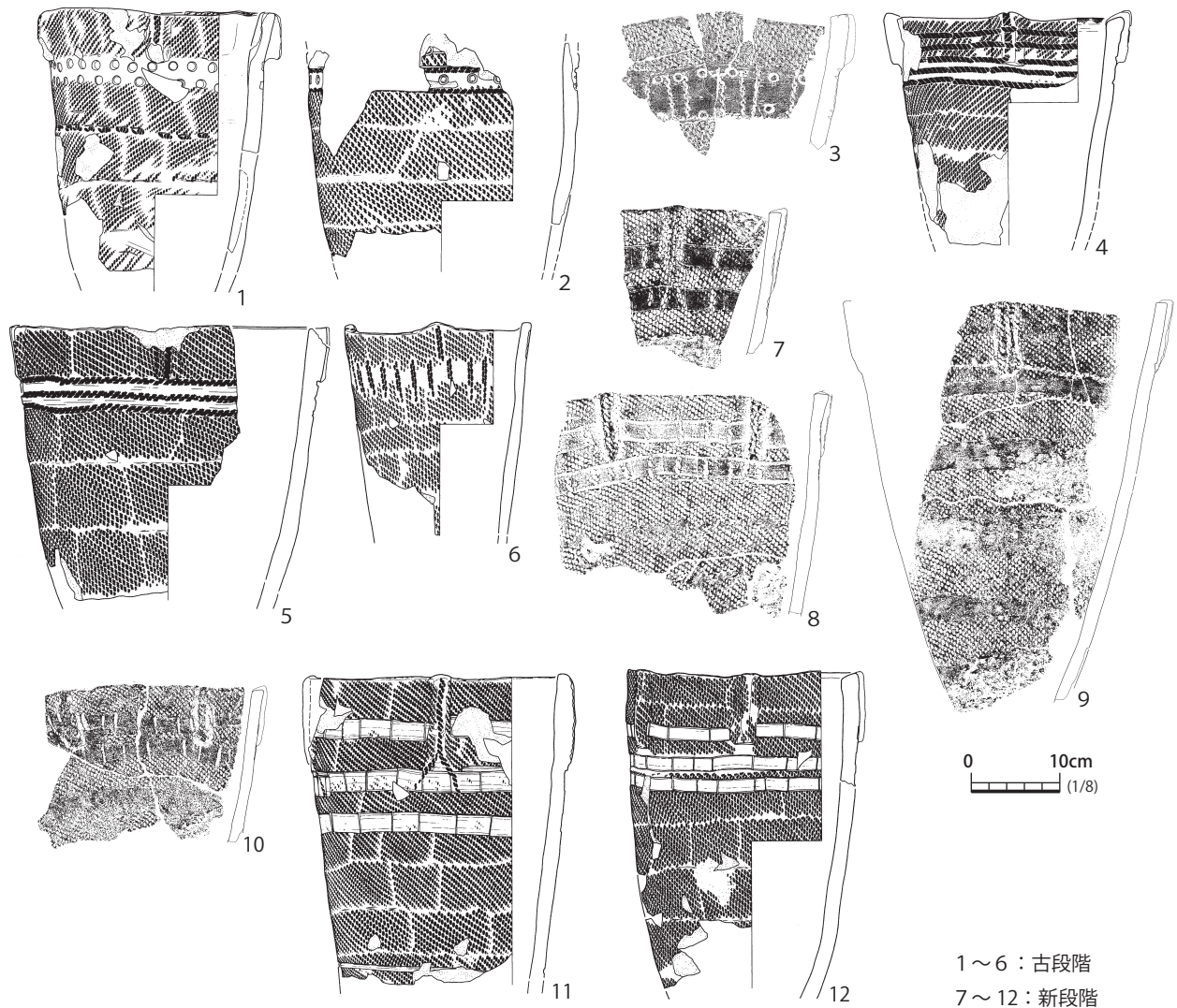


図10 天寧1遺跡出土の羅臼式土器

から同新段階への変遷過程が示唆される。また、新段階の中でも、無文帯上の文様の施文具が縄文原体からヘラ状工具へと変化していた可能性もあるだろう。

羅臼式古段階と同新段階の土器の分布をみると、前者はオホーツク海側から根釧地域にかけて広く分布し、後者はオホーツク海側に分布が偏る。根釧地域において新段階の土器は、羅臼町植別川遺跡（豊原・涌坂 1981）、根室市温根沼2遺跡（笠原ほか編 2019）、標茶町久著呂林道遺跡第2地点（豊原 1971）、同町トマンベツ遺跡（豊原 1974）、釧路町天寧1遺跡（工藤ほか編 2008）などの少数遺跡のみでみとめられる。したがって、羅臼式の分布は、その後半期になるとオホーツク海側へ縮小したと考えられる。

丸松Ⅰ式と丸松Ⅱ式

丸松式については、十勝地域を中心とした太平洋側に分布し、オホーツク海側での分布はみとめられていない。各遺跡での出土事例をみると、丸松Ⅰ式土器と丸松Ⅱ式土器の両者が出土している遺跡を除くと、丸松Ⅱ式土器のみが出土している遺跡が多いこと

がわかる。標茶町トマンベツ北遺跡第2地点（豊原ほか 2004）2号住居址の床面と覆土からは丸松Ⅱ式土器がまとめて出土している。また、芽室町北明1遺跡（越田ほか編 1992）は、丸松Ⅱ式の単純遺跡といえるだろう。つまり、丸松Ⅱ式は丸松Ⅰ式と区別され、ひとつの段階を形成していたと考えられる。

根釧地域の様相

それでは、羅臼式と丸松式の間にはどのような時間的関係性があったのだろうか。羅臼式と丸松式との両者が分布する根釧地域には、羅臼式と丸松Ⅰ式とのそれぞれの文様要素を併せ持つ土器が出土している。標茶町トマンベツ北遺跡第2地点（豊原ほか 2004）出土土器（図11）は、口縁部に無文帯が一条めぐる羅臼式古段階に相当する土器である。しかし、胴部には丸松Ⅰ式にみとめられる縄を押捺したハの字状文様が施されている。一方、根室市別当賀一番沢川遺跡（広田ほか編 2019）出土土器（図12）は、口縁部直下に円形刺突文が施されており、丸松Ⅰ式に相当する。しかし、丸松Ⅰ式では肥厚帯もしくは沈線によって区

画される口縁部が、羅臼式新段階にみられるへら状工具による無文帯によって区画されている。羅臼式と丸松式とは、いずれも細岡式から分化したと考えられる土器群であるため、これらの事例はキメラ土器⁷⁾といえるだろう。

以上の事例から、羅臼式は丸松 I 式に並行すると考えられる。それぞれのキメラ土器をみると、羅臼式古段階の土器に丸松 I 式の文様が加わったもの、丸松 I 式の土器に羅臼式新段階の文様が加わったものであると考えられ、母体となる土器が羅臼式古段階から丸松 I 式へと変化している。また、先述の通り、羅臼式の遺跡は新段階になると減少し、オホーツク海側へ分布が縮小している。このことから、羅臼式古段階では客体的だった丸松 I 式が、羅臼式新段階になると、主体的になった可能性もある。両者の明確な共伴事例は得られていないが、根釧地域ではオホーツク海側を中心に展開していた羅臼式と、十勝地域を中心に展開していた丸松 I 式とが混在していた状況が考えられるのではないかと(図 13)。本稿では、それらがまとまって出土している釧路町天寧 1 遺跡(工藤ほか編 2008)の名称から、根釧地域における本段階を「天寧 1 遺跡」の段階として仮に設定する。

その後、根釧地域では十勝地域と同様に丸松 II 式が展開すると考えられる。同時期のオホーツク海側に関し

ては、羅臼式に後続する土器型式がないことから、羅臼式が存続する可能性が指摘されている(豊原 2008)。しかし、現段階では羅臼式新段階と丸松 II 式の明確な並行関係を示す事例がないため、丸松 II 式並行期のオホーツク海側の様相については不明なままである。

3-2-5. 小結

以上の議論をふまえ、北筒系土器が展開する道東地方の編年を整理すると表 2 のようになる。まず、トコロ 6 類は道東における北筒系土器の第一段階であり、道東全域で斉一性がみとめられる。後続するトコロ 5 類から細岡式でも大きな変化はなく、道東内で斉性をもって展開している状況である。しかし、その後北筒系は、羅臼式と丸松式の二つの系統にわかれ、オホーツク海側と太平洋側で地域差が生じる。そのような中、太平洋側の根釧地域では、羅臼式と丸松 I 式が混在する段階(天寧 1 遺跡)が存在する。そして、最終段階には、太平洋側のみに丸松 II 式が展開していた様相が理解できる。

4. 道央・道北における北筒系土器

4-1. 道央の様相

道央では、道東におけるトコロ 6 類に相当する土器群がみとめられている(図 14)。その中でも道東にお

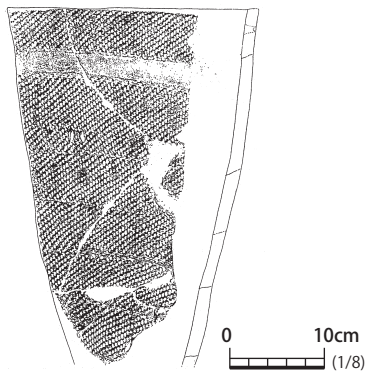


図 11 トマンベツ北遺跡第 2 地点出土土器

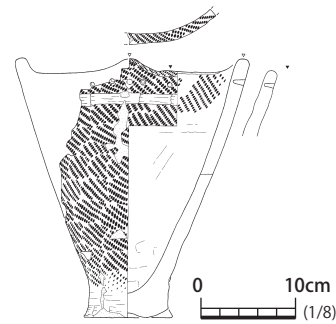


図 12 別当賀一番沢川遺跡出土土器



図 13 羅臼式土器と丸松 I 式土器の分布

表2 道東における編年

オホーツク海側	太平洋側	
	根釧	十勝
	トコロ6類	
	トコロ5類 細岡式	
羅臼式(古) 羅臼式(新)	(天寧1)	丸松Ⅰ式
?	丸松Ⅱ式	丸松Ⅱ式

いて古い様相のトコロ6類とした、押引文や刺突文が施された土器群が目立ち、地文のみのももみとめられる。また、道央に特徴的なものとして、押引の施された貼付文を有する土器群(図14-1~11)が存在する。そのような貼付文に加え、地文の結束・結節羽状縄文や尖った断面三角形の口縁部形態などの諸要素は、サイベ沢Ⅵ式(兒玉ほか1958)や萩ヶ岡1~3式(高橋1982)など道央にみとめられる円筒上層系土器⁸⁾からの系譜である可能性も指摘されている(影山2010)。このような貼付文を有するトコロ6類は道央特有であり、道東では出土事例がない。北筒系の出現にも関わる可能性もあり、詳細は後述する。逆に道央では、口縁部肥厚帯上に縦位の沈線文を施した新しい様相をもつトコロ6類や道東のトコロ5類以降の北筒系土器の類例は、基本的のみとめられていない。

道央の土器型式編年において、北筒系土器(トコロ6類)の後に位置づけられているのが、所謂余市式土器であり、一般的に道東の北筒系土器(トコロ5類以降)と並行すると認識されている。ここでは、従来の余市式に相当する土器群を仮に余市系土器と呼称することにする。北筒系土器の時間的位置づけを検討するためには、この余市系土器の編年的位置づけを明確化し、北筒系土器との関係性も理解しなければならない。所謂余市式土器の細分や成立過程に関する様々な議論(桑原1968;高橋1972a・b,1981;大沼1981,1989;藤本1981;高橋1996)が蓄積されてきたが、他系統土器との関係性を踏まえた余市式期の編年は未だに整理できていないように感じられる。その原因のひとつは、当該期の道央には北筒系、余市系、道南系⁹⁾などの複数の土器系統が交錯しており、それらの関係性が難解であるためと思われる。したがって、道央の編年に関しては、各土器系統の整理をおこないつつ、今後再検討する必要があるだろう。一方、北筒系と余市系の時間的な関係性を示す出土事例が少ないことも課題である。余市系と北筒系土器の共伴事例は、門別町エサンヌップ2遺跡H-27¹⁰⁾(長谷山・阿部編1990)、や富良野市無頭川遺跡「溝」遺構(杉浦1988)などでみとめられるのみである。また、北

筒式系と余市式系土器のキメラ土器が、江別市小島の沢遺跡(中村・松下1976)や北見市(旧常呂町)岐阜第二遺跡(藤本・宇田川編1982)などで出土している。その他にも両系統間には茅沼型刺突文などの共通する文様要素もあり、それぞれの影響関係が示唆されるが、決定的な根拠に欠ける。

ここで、道央と道東太平洋側との中間に位置する富良野地域に注目したい(図15)。富良野盆地には石狩川水系の富良野川と空知川が走り、狩勝峠を越えて道央と道東を往来しやすい地形にあり、当時も人やものの頻繁な往来があったことは容易に考え得る。本地域における所謂北筒式や余市式土器やそれらの編年的な関係性については、各遺跡調査による事例から様々な考察がなされてきた(佐藤ほか編1987;杉浦1989;杉浦・澤田2002など)。その中でも、継続的な調査がおこなわれている富良野市無頭川遺跡(杉浦1988,1992,1996;杉浦・澤田1999,2000,2002)では、所謂細岡式土器(北筒系)と伊達山式土器(余市系)とが混在する出土状況や中間的な文様要素をもつ土器群がみとめられることなどから、時間的に近接していた可能性が指摘されている(杉浦・澤田2002)。このように、富良野地域は、北筒系と余市系土器の関係性を検討する上で鍵となる地域のひとつである。

4-2. 道北の様相

4-2-1. 北筒系土器

道北においても、北筒系土器の出土が確認されているが、道東や道央と比較して、発掘調査事例が少なく、踏査などによって遺跡の存在が確認されている程度であった。特に、宗谷地方における縄文時代の遺跡に関しては、未発見の遺跡が多く存在している可能性も指摘されている(新美2019)。このように道北における北筒系土器に関しては、情報が断片的であることから、これまで不透明な状況が続いていた。

そのような中、道北では稀な北筒系のまとまった資料が稚内市大岬小学校付近で採集されている(福田・夏木編印刷中【2022】)。稚内市立大岬小学校は、宗谷岬のオホーツク海側に面した海拔約3.9mの低位段丘に位置する。現在、大岬小学校の敷地内には、オニキリベツ貝塚という縄文晩期と続縄文の埋蔵文化財包蔵地が登録されており、周辺には、主として縄文時代からオホーツク文化までの遺跡が確認されている。大岬小学校関連資料は、詳細な出土地点や出土状況が不明である。しかし、縄文土器はⅠ群(円筒上層系・北筒系)とⅡ群(道南・東北系)に分類可能で(福田・夏木編印刷中【2022】)、宗谷地方における北筒系土器を理解するために欠かせない資料といえる。ここでは、そのうち北筒系に相当するⅠb群・Ⅰc群・Ⅰd

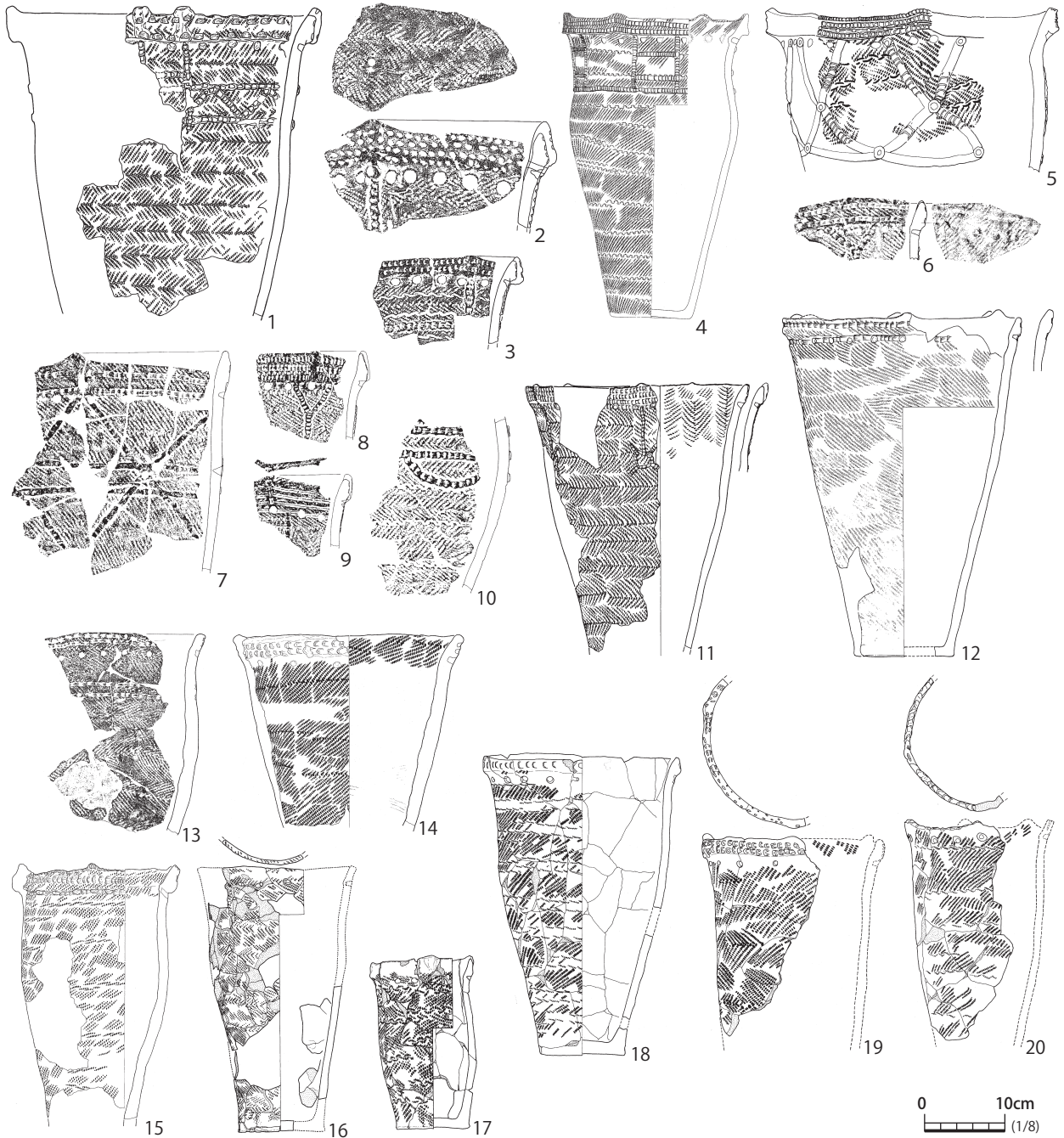


図 14 道央地方における北筒系土器

1～3：静川 B 地区、4：美沢 2、5・6：萩ヶ岡、7～12：フゴッペ貝塚、13・14：チブニー 2、
15：オルイカ 2、16・17：中島松 5 B 地点、18～20：中島松 5 A 地点

群の分類内容に基づき、道北の北筒系土器（以下、大岬小 I b 群・同 I c 群・同 I d 群とする）についてまとめた。

大岬小 I b 群 (図 16- 1～6)

断面三角形の口縁部肥厚帯をもち、その直下に円形刺突文が施される土器群。口縁部肥厚帯上を横環、円形刺突文直下から垂下する半截竹管状工具やへら状工具による押引文が施される土器と地文のみの土器とがある。地文は単節の斜行縄文もしくは羽状縄文であり、口縁部内面にも地文が施される土器もある。明確な口

縁部肥厚帯がないものや山形突起をもたない平口縁土器もみとめられる。他の土器群の胎土には、多量の砂が含まれることが多いが、本土器群の胎土には少量しか含まれず、植物繊維や細礫が混和されている。

本土器群は道東のトコロ 6 類に相当する。音威子府村咲来 2 遺跡 (佐川・皆川 1992)、礼文町船泊遺跡 (西本編 2000)、稚内市恵北 1 遺跡 (福田・萩野編 2020) など道北各地で出土が確認されている。

大岬小 I c 群 (図 16- 7～20)

断面形状が丸みを帯びた三角形、あるいは長方形の

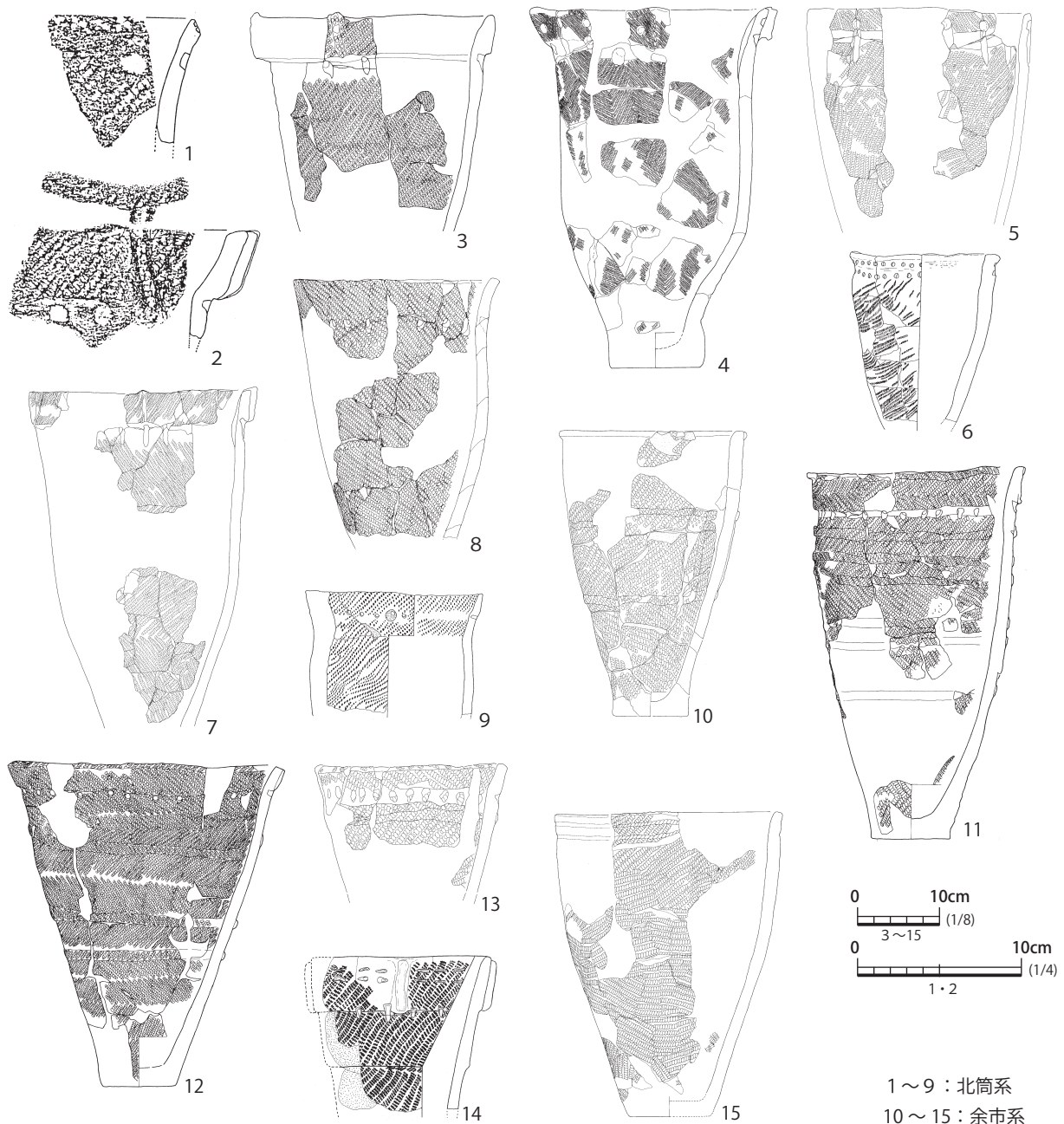


図 15 富良野地域における北筒系土器と余市系土器

1～3・6～14：無頭川、4・5・15：南扇山

幅広な口縁部肥厚帯をもつ土器群であり、1類と2類にわけられる。

1類 (図 16- 7～13)

断面が丸みをもった三角形もしくは長方形の口縁部肥厚帯上に縦位沈線が施される土器群。肥厚帯上に下垂帯である縦位の棒状隆起を有する口縁部破片が多い。円形刺突文は竹管状工具の刺突によって施されている。地文は単節の斜行縄文もしくは羽状縄文であり、口唇部や口縁部内面にも施される場合がある。胎土には砂が多量に混和しているものが多い。肥厚帯上に縦位の沈線はあるが、平口縁で円形刺突文をもたない土器もある (図 16- 8)。

本土器群は道東のトコロ 5類に相当する。口縁部肥厚帯の断面形状には三角形から長方形のものが見られ、I b群からI c群 2類の過渡期にあたる。稚内市豊岩 5遺跡 (佐藤・佐藤編 1986) で類例がみとめられる。

2類 (図 16-14～20)

断面長方形で幅広の口縁部肥厚帯をもち、その上に縦位の棒状隆起を有する土器群。肥厚帯直下には竹管状工具や指頭による円形刺突文がめぐる。図 16-20には、口縁部肥厚帯上にも同様の円形刺突文が施されている。地文は複節の羽状縄文もしくは斜行縄文であり、口唇部や口縁部内面に施される場合もある。口唇

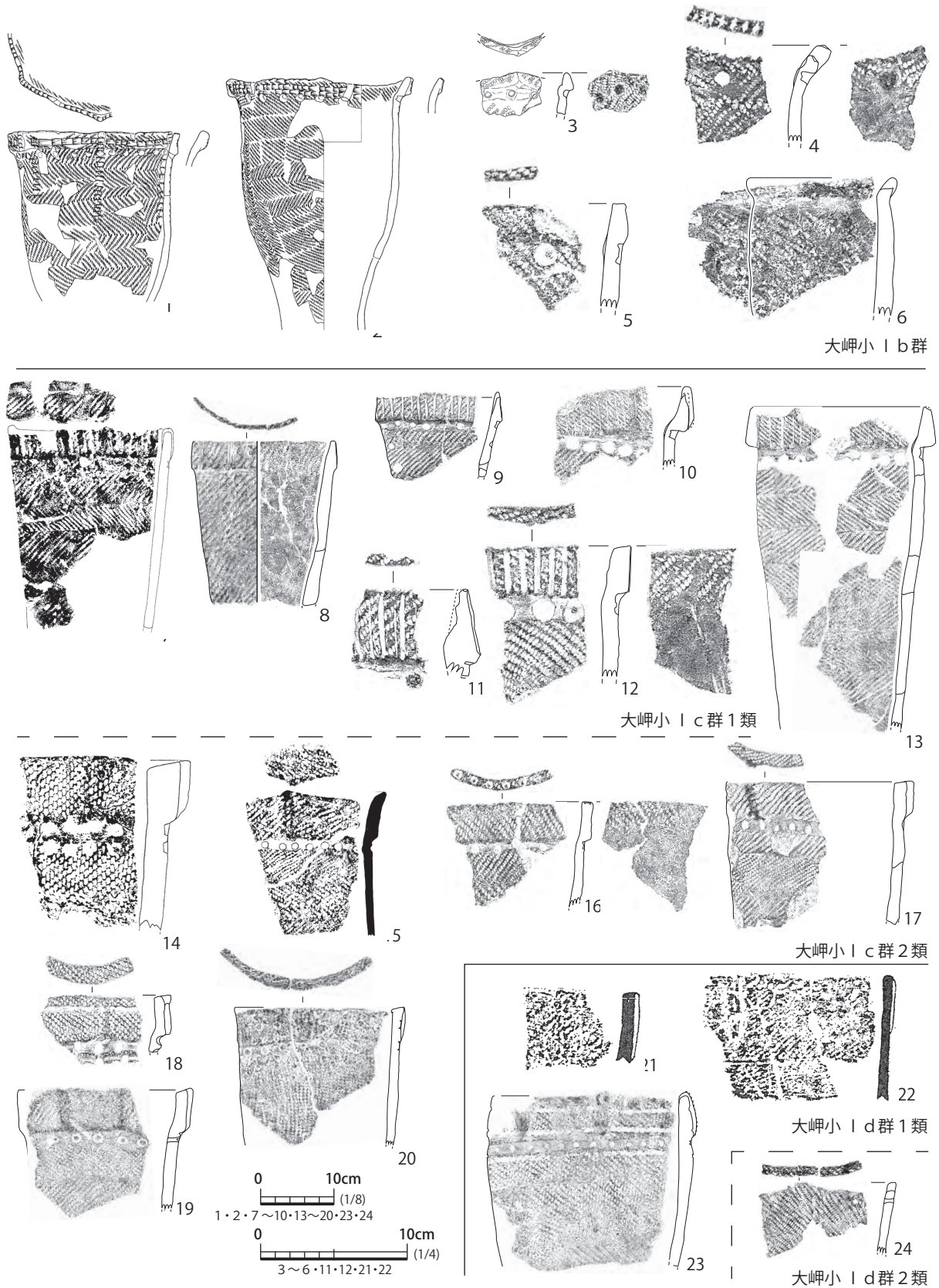


図 16 道北における北筒系土器

1・2：咲来2、3：恵北1、4～6・9～13・16～20・23・24：大岬小学校、
7・8：豊岩5、14：オニキリベツ、15：クッチャロ湖畔、21・22：浜猿払

部に竹管状工具の先端を押し込んだ刺突が施される土器もある(図16-16)。

本土器群は道東の細岡式に相当するといえるが、茅沼型刺突文はみとめられない。また、口縁部肥厚帯の上端部に横環する隆帯を追加して貼り付けたもの(図16-18)もあり、これは道東ではみとめられない特徴である。本土器群の類例は、稚内市オニキリベツ2遺跡(菅・飯田1973)、浜頓別町クッチャロ湖畔遺跡(大場・菅1977)でみとめられる。

大岬小I d類(図16-21～24)

口縁部肥厚帯がなく、縦位の棒状隆起はあるものがないものがある。本群は、器形や口縁部文様帯の文様構成に基づき、以下1・2類にわけられる。

1類(図16-21～23)

口縁部に縦位の棒状隆起、縄線文や円形刺突文がある土器群。地文は複節と単節の斜行縄文である。図16-23は口縁部に3条の縄の側面押圧文が横環する。下位2条の間に関しては、地文が磨り消されて無文帯となり、その中に竹管状工具による円形刺突文が施されている。地文は複節の斜行縄文である。胎土には多量の砂、細・中礫が含まれており、焼成はあまり良くない。

本土器群は道東の羅臼式古段階に相当するが、類例は少なく、猿払村浜猿払遺跡(松下・石川1965)の資料(図16-21・22)が含まれると考えられる。

2類(図16-24)

口縁部に緩やかな山形突起がある地文のみの土器。地文は横位の回転縄文で器面外面から口唇部まで施されている。多量の砂が混和されており、焼成はあまり良くない。

本土器群も道東の羅臼式古段階に相当するといえる。現状では、道北において類例はなく、道東の北見市(旧常呂町)岐阜第三遺跡(藤本1977)などでみとめられる。

以上のように、道北では道東の北筒系のトコロ6類から羅臼式古段階に相当する土器が出土している。現段階では、羅臼式新段階や丸松式に相当する土器は確認することができていない。

4-2-2. 余市系土器

道北では北筒系のほかに道東を中心に展開する余市系土器も検出されている。余市系土器は、礼文町船泊遺跡(西本編2000)で多く出土しており、それらの時間的、地域的な位置づけに関する検討がおこなわれている。そこで、船泊遺跡出土資料のうち、余市系土器であると特定できる土器群を2群(以下、船泊1群・2群とする)に区分し、類例を加えることで道北における余市系土器についてまとめた。

船泊1群(図17-1～11)

平口縁もしくは波状口縁をもつ筒形の土器群。口縁部を横環もしくは波状口縁の波頂部から垂下する縄線文が施される土器と、地文のみの土器とがある。地文は縦走する単節の回転縄文もあるが、斜行縄文や羽状縄文が多い。複節縄文はみとめられない。本土器群は船泊遺跡(同上)におけるB群1類a種～e種の一部に相当する。

以上の特徴は道東のタブコプ式(佐藤・宮夫編1984)の一部に共通している。しかし、タブコプ式にみとめられる段状の器面をもつ土器や縄端を押圧した円形刺突文をもつ土器は出土していない。名寄市智東2(智東B)遺跡(氏江ほか編1980)、利尻町亦稚貝塚(岡田ほか編1978)などに類例がある。

船泊2群(図17-12～22)

小突起をもつ口縁あるいは波状口縁であり、頸部が緩やかに括れる土器群。地文は単節の斜行縄文や羽状縄文であり、それ以外の文様は施されていない。本土器群は船泊遺跡(同上)におけるB群1類e種の一部と同f種に相当する。

器形は道東の手稲砂山式(石川1967)に似るが、手稲砂山式に特徴的な連弧状・渦巻状の沈線文や縄線文、指頭による刺突が施された粘土紐が付されないことに大きな違いがみとめられる。船泊遺跡以外で道北の類例を確認することはできない¹¹⁾。

4-2-3. 小結

以上、周知の資料から道北における北筒系と余市系土器を概観した。道北は地理的にも両地域に隣接していることから、それぞれからの影響を受けていたのだろう。しかし、道北では、各土器群の時間的な位置づけを裏付けるような出土状況が確認されていないため、今後、道東や道東の土器型式編年との対応関係から道北における編年を整理していくことが求められる。また、道北内にも地域差が存在していた可能性があり、それを無視した議論では道北の実態を誤って解釈することにつながるだろう。当該期の道北は、遺跡分布や地理的環境に着目すると、オホーツク海側、宗谷湾沿岸地域、日本海側、天塩川流域(内陸部)の多様な環境をもつ諸地域にわけられる。道北の土器群にみとめられる道東や道東の土器との関係性を整理するためにも、以上の各地域における様相を明らかにすることが重要である。

5. 北筒系土器の広がり

5-1. 北筒系土器の段階区分

以上、道東における北筒系土器の編年と同時期における道東や道北の様相を踏まえると、北筒系土器は第

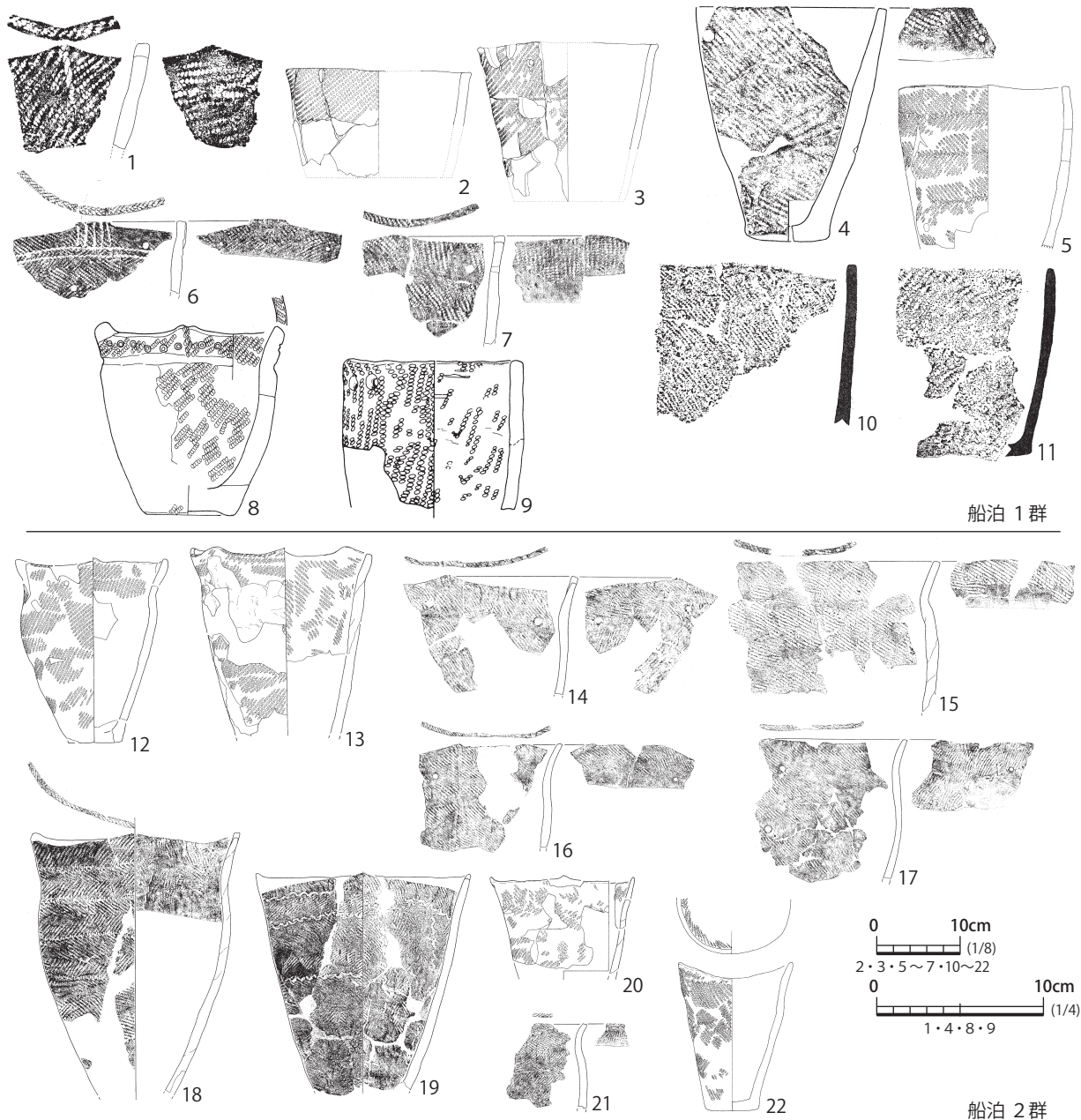


図 17 道北における余市系土器

1・9：亦稚、2・3：智東2、4～8・12～22：船泊、10・11：浜猿払

1段階から第4段階に区分することができる。道央と道北の北筒系土器が道東のものに並行すると仮定すると、各段階に相当する土器群の分布は図 18 のようになる。

第1段階は、トコロ6類に相当する土器群が展開する段階である。分布は道央・道北・道東と広範囲に及ぶが、地域差も存在している。また、道央の貼付文を有する土器群に関しては、時期的に古く位置づけられる可能性もある。

第2段階は、トコロ5類と細岡式に相当する土器群が展開する段階である。分布は縮小し、道東から道北で確認できる。道央では、富良野地方を除き、基本的にみとめられない。

第3段階は、道東オホーツク海側に羅白式、十勝地域から道央の富良野地域に丸松Ⅰ式、根釧地域に羅白式と丸松Ⅰ式が混在している段階である。いずれも前段階の細岡式から系統的に分化した土器群であるが、分布の偏りがみとめられる。現状では道北における羅白式相当（大岬小Ⅰd類）土器は、前段階のものと比較して僅少である。

第4段階は丸松Ⅱ式が展開する段階であり、道東の根釧地域から十勝地域、道央の富良野地域のみとめられる。道東オホーツク海側には、本段階の土器群が確認できず、他系統の土器のみとめられないため様相は不明である。

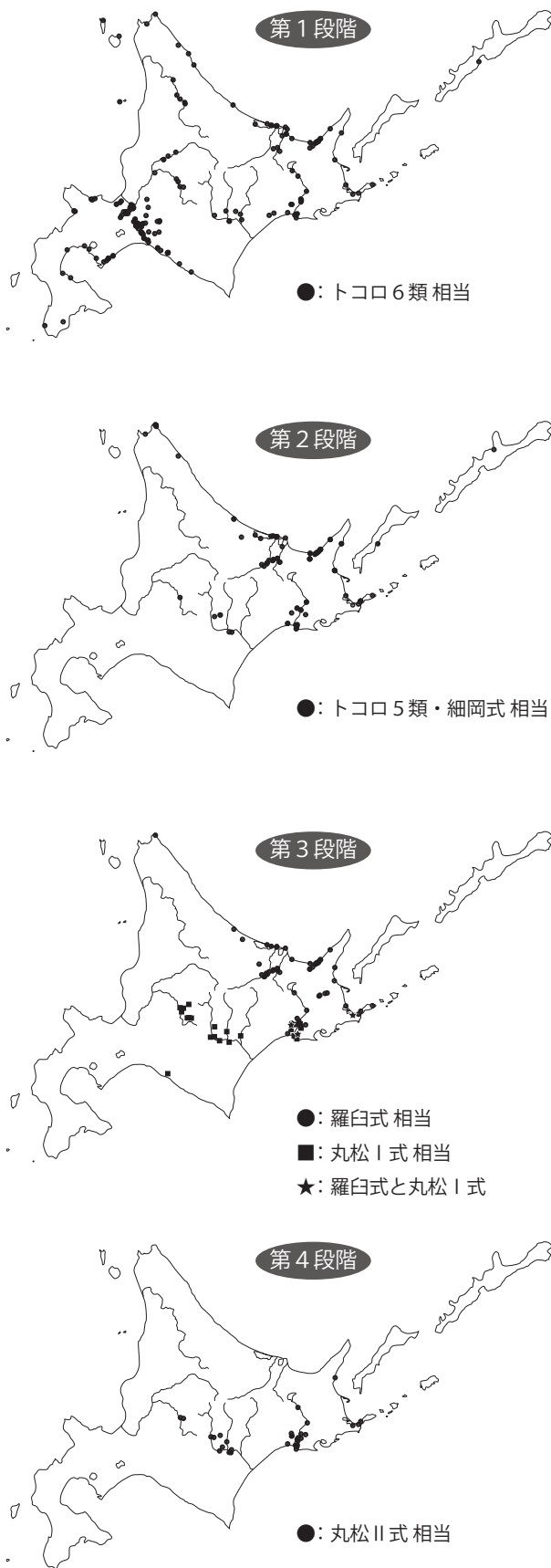


図18 北筒系土器の分布

5-2. 北筒系の出現について

5-2-1. 道東における他系統土器

それでは、北筒系土器はどのように出現したのだろうか。従来、北筒式の前身としての位置づけられてきた土器型式にモコト式（藤本 1972, 1980b, 1981；大沼 1989）がある。モコト式は、口縁部に刺突文・押し文・沈線文や、上部に刺突文や指頭・縄側面の押し文が施された貼付帯を有することが特徴である（図 19）。平口縁と波状口縁の両者があり、胴部にふくらみを持ち口縁部にむかって開く器形が一般的で、地文は基本的に単節の斜行縄文である。これらの特徴をみると、モコト式とトコロ6類は近縁関係にあるとはいえるものの、同一系統にあると判断するための根拠に乏しい。むしろ、上野（1978）などによって指摘されたように道央の柏木川式（高橋編 1971）と同一系統の土器として捉えるほうが自然である。そこで、同一系統であると考えられる道南の大安在B式（倉谷・小笠原編 1972）、道央の柏木川式、道東のモコト式とされてきた土器群をまとめて柏木川系土器と仮称すると、道東の資料では、柏木川系から北筒系へのスムーズな変遷を裏付けることができない。

また、縄文中期前半の道東北には押し文を主体とする平底押し文土器が展開するとされているが、その時間的な位置づけについても検討の余地がある。なお、ここでは、他の土器群同様、平底押し文系土器と呼称する。まず、常呂川河口遺跡（武田編 2000）では層位別の出土資料をもとに、Ⅰ群とⅡ群とに分類されたが（図 20）、それらの中間層から古い様相のトコロ6類も出土しており、それらの関係性が注目されている（武田 1998）。一方、それとは異なり、常呂川河口押し文Ⅰ群よりトコロ6類の方が上層で検出された例もあり（熊木 2020）、各土器群の先後関係が理解しづらくなっている。

そのような中、熊谷（2001）は、文様構成などの類似性に注目し、常呂川河口押し文Ⅱ群を円筒下層d式～円筒上層a式、同Ⅰ群を円筒上層c式～円筒上層d式に対応させている。また、道央の柏木川系に先行する円筒上層系土器と平底押し文系土器とのキメラ土器（図 21）も複数遺跡で類例が出土している（森 1984）。したがって、平底押し文系土器は基本的に北筒系土器より古く位置づけられる可能性が高い。しかし、常呂川河口遺跡の事例がある以上、両者が一部並行または錯綜していた可能性も否定できない。平底押し文系土器には口縁部に円形刺突文があるものもあり、北筒系土器との関係性も示唆される。そのため、平底押し文系土器の位置づけに関しても、今後改めて検討する必要があるだろう。

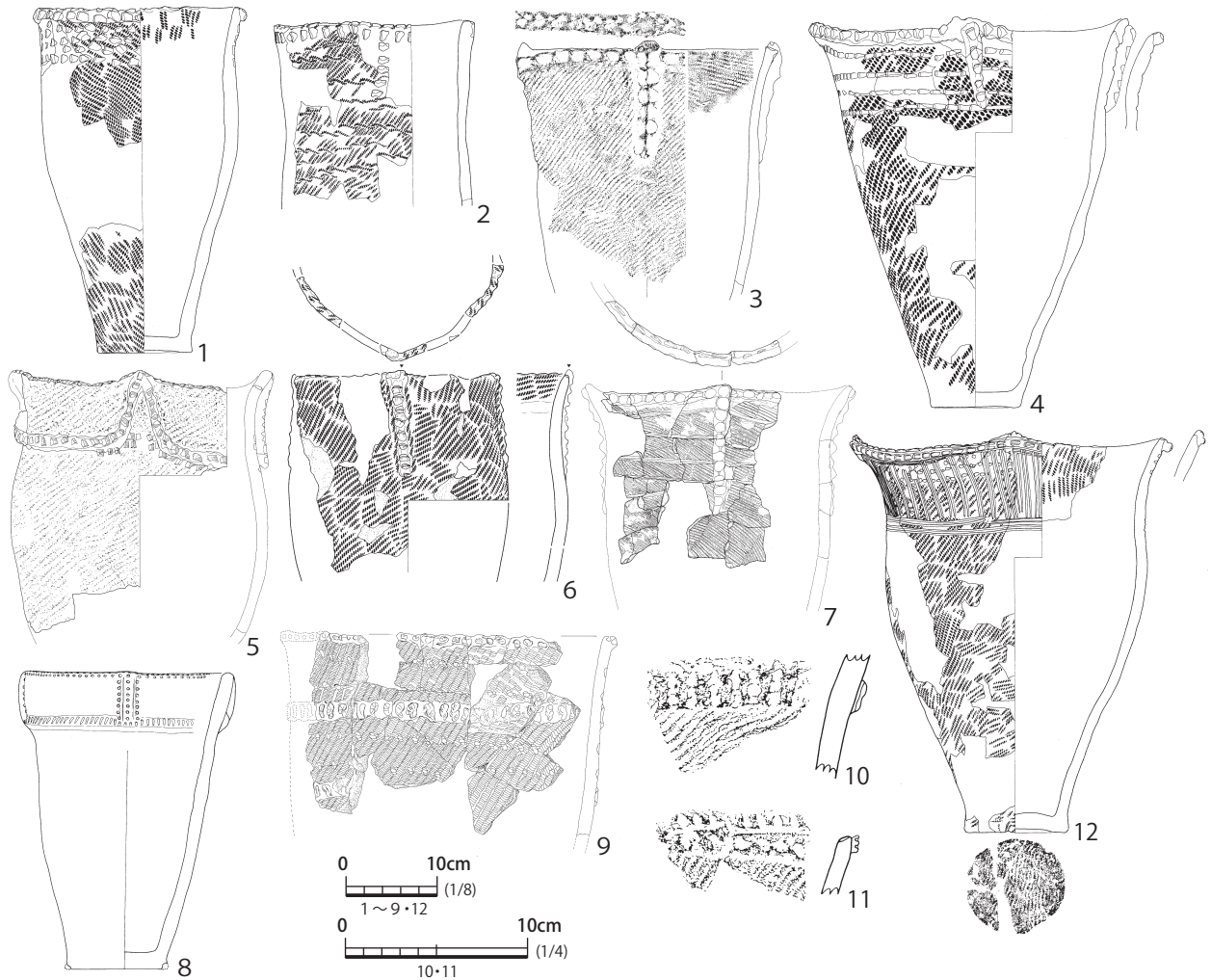


図 19 モコト式土器

1～4：十日川5、5：元町3、6：天寧1、7：ピラオツマッコウマナイチャシ跡、
8：イチャニチシネ第1 豎穴群、9：ナヨロの沢、10・11：小林C 地点、12：北明1

5-2-2. 道北の事例

音威子府村咲来2 遺跡（佐川・皆川 1992）では、古い様相をもつトコロ6 類に相当する土器（Ⅲ群3 類・同4 類）と、それに類似するが肥厚帯直下の円形刺突文を欠く土器（Ⅲ群2 類）が包含層でまとまって出土している（図 22）。大泰司（2020）は、このⅢ群2 類土器を「道北型柏木川式」と仮称し、柏木川式の地方系として柏木川式やモコト式より緻密な縄文原体と薄い器壁をもつ土器であると指摘している。口縁部肥厚帯上に押引文を有する土器群は、道北の円筒上層系土器（大泰司【同上】）がC 類とする土器群）にもみとめられ、口縁部から垂下する押引文（図 22- 2～4）は柏木川系にみとめられる特徴である。そこで、咲来2 遺跡Ⅲ群2 類を柏木川系の土器群として捉えてみると、道北の円筒上層系の一部がそれを引き継いで柏木川系へと変化し、更に北筒式系へと変遷していく様子が理解できる。つまり、道北では柏木川系と北筒式系とが非常に近接していたといえるだろう。以上のような

押引文を特徴とする道北の円筒上層系土器や柏木川系土器は、礼文町上泊3 遺跡（種市編 1985）、利尻富士町港町1 遺跡（山谷 2012）、枝幸町ヤマウス遺跡（河野 1967）、同町ホロボツ右岸段丘遺跡（河野 1967）、利尻町種富町第1 遺跡¹²⁾（福田ほか 2002）などで出土している。

5-2-3. 道央の土器系統との関係性について

先述の通り、道央ではトコロ6 類の中でも古い時期に位置づけられる可能性のある土器群が出土している。影浦（2010）は、そのような土器群の各属性の特徴を検討したうえで、北筒式の初源が中期の中頃¹³⁾の石狩低地帯にあることを指摘している。筆者も現状では、貼付文を有する土器群がトコロ6 類の中で古く位置づけられ、北筒系の出現期に相当するものであると考えているが、系統的な関係性については慎重に検討しなければならないだろう。例えば、萩ヶ岡1～3 式などの円筒上層系土器と比較すると、口縁部肥



1～6：II群
7～11：I群

0 10cm
(1/8)

図 20 常呂川河口遺跡出土土器

厚帯上の連続的な押し文や貼付文による胴部文様などは確かに類似している。しかし、トコロ6類は断面三角形の口縁部肥厚帯で小さな山形突起を有するのに対し、以上の円筒上層系土器は分厚い肥厚帯で大きな台形状や棒状の突起を有する。このように、口縁部肥厚帯や突起の形態には差異がみとめられる点には注意しなければならないだろう。

ここで、厚真町厚真1遺跡（苫小牧市教育委員会編1986）出土土器を標識に仮称された厚真1式（赤石編1998；赤石1999；笠原ほか編2017）をみよ。

厚真1式は石狩低地帯南部に分布し、口縁部文様帯の類似性から石狩低地帯北部に分布する手稲前田式（上野・高橋編1975）に対応することが指摘されている（赤石編1998）。しかし、胴部上半に及ぶ押し文の施された貼付文は、萩ヶ岡1・2式などの円筒上層系土器に類似する。そこで、貼付文を有するトコロ6類と比較すると、口縁部肥厚帯上の連続的な押し文が少ないことなどの相違点も見受けられるが、胴部にかけての貼付文、断面三角形肥厚帯、口縁部の小突起や結束羽状縄文など共通する要素をもつ。このような断面三角形

の口縁部肥厚帯は大麻V式（中村・君 1970）、フゴッペ貝塚式（熊谷 1991）などの縄文前期末～中期初頭頃における道央の在地土器（大泰司【2021】における器形 B 3 にみとめられる肥厚帯を母体とする土器）の系譜を引くと考えられる。このように北筒系土器の出現期には、口縁部突起が発達した円筒上層系土器と在地土器の特徴を残した土器群が複雑に交わっていた可能性もある。したがって、北筒系の系譜を明らかにするためには、道央における円筒上層系土器の再検討が鍵となるだろう。

5-3. 小結

このように、北筒系土器の成立過程を示唆する事例は、道北や道央においてみとめられ、現状では道央の

貼付文を有するトコロ6類が最も古く位置づけられる可能性が高い。しかし、円筒上層系土器や柏木川系土器が展開していた道央や道北における複雑な交渉関係の中で、トコロ6類の起源が多元的であったことも考えられるだろう。

北筒系土器の第1段階は道内で斉一性がみとめられるが、第2段階になると、分布が道東から道北に縮小する。一方、道央では北筒系を引き継ぎ、道南系土器の影響を受けた余市系土器が展開する。道東から道北では、その後第3段階まで大きな地域差はみとめられない。しかし、第4段階になると、オホーツク海側では羅臼式、十勝地域では丸松式が展開し、その間に位置する根釧地域ではその両者が混在した状況が考えられる。このように、北筒系土器は最終的に道東で二つの系統に分化して終焉を迎える。しかし、土器系統は統合や分化を繰り返すため、系統の終わりを明確に区切るのは難しい。北筒系土器においても同様で、本稿において定義した北筒系の場合には丸松Ⅱ式の段階に置かれるが、実際には余市系土器にも北筒系の要素が引き継がれている。したがって、余市系土器の時空間的な広がりについても検討していく必要があるだろう。

なお、以上で振り返った各段階の編年における位置づけに関しては、道央以南の編年を整理しない限り明言できない。しかし、これまでの放射性炭素年代の

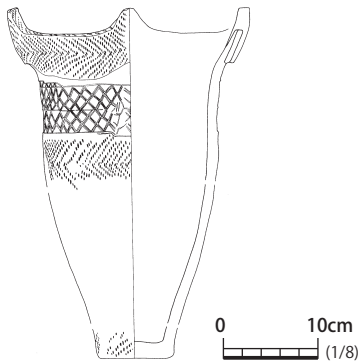
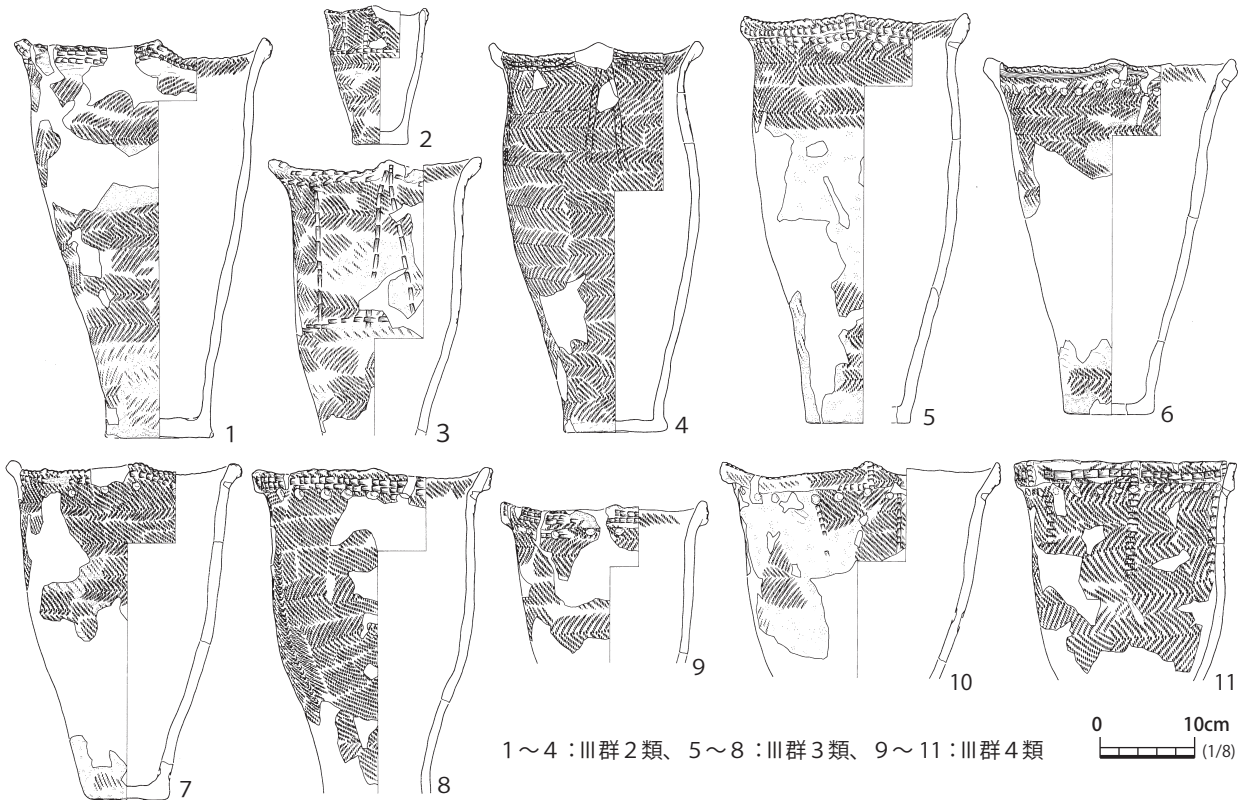


図 21 楠遺跡出土土器



1～4：Ⅲ群2類、5～8：Ⅲ群3類、9～11：Ⅲ群4類

図 22 咲来2遺跡出土土器

測定事例の検討（村本 2009；影浦 2010；広田ほか編 2019）によると、北筒系土器の暦年代は約 4780-3570 cal BP¹⁴⁾ の間に収まっており、おおよそ縄文中期後葉から後期中葉（小林 2017）を示している。

6. おわりに

本稿では、北筒系土器の変遷と展開を理解するために、道東・道北・道央における北筒系土器の様相について再整理した。道東における北筒系土器の編年に関しては、細岡式の後に系統分化した羅臼式と丸松 I 式が地域差を示す編年案を提示した。なお、その際の根釧地域については、明確な時間的関係性を示す資料を待って、今後型式設定する必要があるだろう。

本研究では、道東に加え道央や道北の資料も検討したうえで、北筒系土器を新たに第 1 段階から第 4 段階に区分し、その時空間的な広がりを捉えた。また、北筒系の出現に関しては、現状では道央や道北の土器群の系譜に求めることができる。これらの結果を縄文研究における編年的枠組みに当てはめるには、道南や本州の編年との並行関係の検討が必要である。そこで、第一の課題はその中間地帯にも位置する道央の編年の再検討である。当該期の道央は、多くの土器系統が交錯していた状況が考えられるが、それらを整理することは、縄文中期／後期移行期における道内の一様相の解明にも繋がるかもしれない。このように、道内の編年を整理していくことで、北筒系土器を東北日本全体における編年的枠組みの中に位置づけることができるようになるだろう。

謝辞

本稿は、2020 年度に東京大学大学院人文社会研究科に提出した修士学位論文をもとにまとめたものである。執筆にあたっては指導教員である福田正宏先生、考古学研究室の佐藤宏之先生、設楽博己先生、石川岳彦先生、金崎由布子先生をはじめとする皆様にご指導・ご助言を賜りました。また、下記の方々や機関にもご指導・ご協力をいただき、本論文を完成させることができました。末筆ながら、記して心より感謝申し上げます。

内田和典、大泰司 統、熊木俊朗、齋藤讓一、坂本尚史、鈴木 舞、北見市教育委員会、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設、北海道埋蔵文化財センター、稚内市教育委員会
(五十音順・敬称略)

註

- 1) 本稿では、北海道の地域区分として一般的に用いられる、道北・道東・道央・道南の名称を便宜的に用いる。言及する遺跡（図 1）との対応関係は、1～16：道北、17～48：道東、49～61：

道央である。

- 2) 北筒 I 式は、その後にモコト式（藤本 1972）と呼称され、北筒式とは異なる型式として認識されるようになる。
- 3) 北筒系土器は、南千島の択捉島や国後島においても確認されている（野村・杉浦 1995、野村 1999、Василевский, Потапова 2017、Можаяев 2018 など）。しかし、報告事例が少なく、様相が不透明であるため、本稿ではその詳細について言及していない。
- 4) これは土器に施文される突瘤文を分類する際の名称であり、外面（Outside）から内面（Inside）の方向に突くものが OI の突瘤文と呼称されている（松下 1965）。
- 5) なかには、山形突起や縦位の棒状隆起をもたない平口縁の土器群も存在する。口縁部肥厚帯の形状や文様の特徴からトコロ 6 類からトコロ 5 類に相当すると考えられるが、山形突起や縦位の棒状隆起をもたないため、それらの判別は難しい。平口縁土器群は、小型のものが多く、また、肥厚帯を省略し、口縁部直下に円形刺突文を施文するものや円形刺突文を欠く個体もある。
- 6) 筆者も資料を実見し、森（2006）の指摘する 15 点がトコロ 5 類であることを確認した。
- 7) 本稿におけるキメラ土器は「一個体の土器に異系統の紋様が施される」（大塚 2000：2 頁）土器を指す。
- 8) 本稿における円筒上層系とは、東北北部から道南にかけて展開している円筒上層式の影響を受けた道央や道北の土器群を指す。
- 9) ここでは道南系と記したが、東北北部から道南にかけての津軽海峡周辺地域に展開する土器系統を想定している。
- 10) 報告書（長谷山・阿部編 1990）では北筒 III 式とされている土器は、地文や円形刺突文を見る限り、本稿における丸松 I 式に相当すると考えられる。
- 11) 船泊遺跡は、北海道南部地域の人々による季節的な利用が指摘されている遺跡であり（西本編 2000）、道北の中でも特殊な状況を示す事例であることに注意する必要がある。同時期の道北全域の様相を示していない可能性もある。
- 12) 調査報告（福田ほか 2002）では観音山式に近い土器として報告されているが、口縁部に施されている刺突文や地文が羽状縄文であること、円筒形の器形をもつことから、道北の円筒上層系土器により近いものであると考えられる。しかし、胴部にみられる数条の無文帯に関しては、ほかに類例が見当たらない。
- 13) 影山（2010）は、サイベ沢 VII 式、見晴町式、萩ヶ岡 1 式・2 式並行期としている。
- 14) 結果的に、別当賀一番沢川遺跡（広田ほか編 2019）の測定値（ $n=13$ ）における年代値の幅を示している。ここでは報告書に記載された炭素年代を OxCal 4.4（較正曲線データ：IntCal 20）を用いて較正した 2 σ 暦年代範囲（95.4%）を提示した。なお、数値は下 1 桁を四捨五入し、10 年単位にしたものである。

引用文献

- 赤石慎三 1999 「苦小牧地方の円筒上層式土器について」『苦小牧市埋蔵文化財センター所報』1：39-54
- 赤石慎三編 1998 『美沢東遺跡群：道道静川美沢線道路改良工事に伴う美沢東 4・5・6 遺跡発掘調査報告書』苦小牧市埋蔵文化財調査センター
- 荒生健志・高山ゆかり編 1988 『元町 3 遺跡』美幌町文化財調査報告書 4 美幌町教育委員会
- 新屋水奈・佐藤 剛編 2002 『恵庭市西島松 9 遺跡』北海道埋蔵文化財センター 179 北海道埋蔵文化財センター
- 石川 徹 1967 「札幌群手稲砂山遺跡出土の土器について」『北海

道考古学』3

- 市川岳朗 2018「観音山式土器について：北見市の出土事例を中心に」『駒澤考古』43：17-34
- 今村啓爾 2006「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」『長野県考古学会誌』112：1-32
- 上野秀一 1978「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」『北海道考古学』14：49-82
- 上野秀一・高橋和樹編 1975『N309 遺跡』札幌市文化財調査報告書 16 札幌市教育委員会
- 氏江敏文・鈴木邦輝・佐藤弘基編 1980『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』名寄市文化財調査報告書 1 名寄市教育委員会
- 宇田川 洋・熊木俊朗編 2001『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 大泰司 統 2020「縄文時代中期北海道の両性具有石器：平岸天神山式との関係」『DOGU』3：29-56
- 大泰司 統 2021「縄文時代中期初頭：北海道日本海側の土器様相」『北海道考古学』57：21-41
- 大塚達朗 2000「異系統土器論としてのキメラ土器論：滋賀里遺跡出土土器の再吟味」『異貌』18：2-19
- 大沼忠春 1981「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66(4)：71-79
- 大沼忠春 1989「北筒土器様式」小林達雄編『縄文土器大観 1：草創期・早期・前期』小学館，339-342
- 大場利夫 1961『北海道北見市南丘観音山遺跡・美里洞窟調査概要』北見郷土研究会
- 大場利夫 1962『広郷遺跡・北上遺跡・美里洞窟・南丘観音山遺跡調査概要』北見郷土研究会
- 大場利夫・菅 正敏 1977「枝幸郡浜頓別日の出遺跡調査報告」『北海道考古学』13：59-77
- 岡田淳子・梶田光明・西谷榮治・西本豊弘編 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 影浦 覚 2010「道央部における北筒Ⅱ式（トコロ6類）の型式幅について」新家水奈・影浦 覚編『千歳市梅川4遺跡（2）』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 269 北海道埋蔵文化財センター，127-140
- 笠原 興・村田 大・新家水奈・阿部明義・吉田裕史洋・佐川俊一編 2017『厚真町上幌内3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 335 北海道埋蔵文化財センター
- 笠原 興・影浦 覚・阿部明義・広田良成編 2019『根室市温根沼2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 354 北海道埋蔵文化財センター
- 加藤晋平 1963「丸のみ形石斧について」『考古学雑誌』48(4)：60-66
- 北構保男 1939「北海道稚内町附近の先史時代遺跡調査豫報」『上代文化』17：32-49
- 北構保男・岩崎卓弥編 1972『浜別海遺跡』北地文化研究会報告 1 北地文化研究会
- 鬼柳 彰・立川トマス・和泉田 毅・森 秀之 1984『楠遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 15 北海道埋蔵文化財センター
- 工藤研治 2008「北筒式土器」小林達雄編『総覧縄文土器：小林達雄先生古稀記念企画』アム・プロモーション，522-529
- 工藤研治・高橋和樹・影浦 覚・越田雅司・福井淳一編 2008『釧路町天寧1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 254 北海道埋蔵文化財センター
- 熊谷仁志 1991「土器」千葉英一・長沼 孝・熊谷仁志・中田裕香・鈴木 信編 1991『余市町フゴッペ貝塚』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 72 北海道埋蔵文化財センター，636-645
- 熊谷仁志 2001「北海道の縄文土器」野村 崇・宇田川 洋編『新北海道の古代 1：旧石器・縄文文化』北海道新聞社，138-177
- 熊木俊朗 2020「縄文時代」『新北見市史』上巻 北見市史編集委員会，94-131
- 倉谷泰賢・小笠原忠久編 1972『大安在B遺跡』上ノ国町教育委員会
- 桑原 護 1966「北筒式土器」『考古学雑誌』51(4)：45-60
- 桑原 護 1968「余市式土器：その研究史と現状、円筒上層式土器との関連について」『考古学雑誌』54(1)：62-76
- 桑原 護 1969「北海道の縄文時代中期の文化」『古代文化』21(3・4)：22-28
- 河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4(6)：114-122
- 河野本道 1967「枝幸町の先史時代」枝幸町史編纂委員会編『枝幸町史』上巻 枝幸郡枝幸町，15-105
- 越田雅司・愛場和人編 2005『根室市穂香川右岸遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 212 北海道埋蔵文化財センター
- 越田賢一郎・佐藤和雄・立川トマス・三浦正人・花岡正光・谷島由貴・山原敏朗編 1992『清水町上清水2遺跡・共栄3遺跡（2）・東松沢2遺跡・芽室町北明1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 76 北海道埋蔵文化財センター
- 兒玉作左衛門・大場利夫・武内收太 1958『サイベ沢遺跡』函館博物館
- 小林 敬編 1985『ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡』美幌町教育委員会
- 小林謙一 2017『縄紋時代の実年代：土器型式編年と炭素 14 年代』同成社
- 駒井和愛編 1963『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻 東京大学文学部
- 佐川俊一・皆川洋一 1992『咲来2遺跡・咲来3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 73 北海道埋蔵文化財センター
- 佐川俊一・和泉田 毅・末光正卓・阿部明義・富永勝也編 2003『千歳市オルイカ2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 189 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤忠雄編 1993『小林遺跡：C地点』芽室町教育委員会
- 佐藤和利・佐藤隆広編 1986『豊岩5遺跡・豊岩7遺跡』稚内市教育委員会
- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 1984『タブコブ』苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
- 佐藤和雄・和泉田 毅・谷島由貴編 1987『深川市向陽2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 42 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤和雄・笠原 興・鈴木宏行・阿部明義編 2012『鶴居村下幌呂1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 287 北海道埋蔵文化財センター
- 澤 四郎 1969「釧路川流域の先史時代」釧路川共同調査団編『釧路川：その自然と生活』釧路市，216-271
- 澤 四郎 1987『釧路の先史』釧路市
- 澤 四郎・河野広道 1962『東釧路』釧路市教育委員会
- 菅 正敏・飯田 勇 1973「稚内オニキリベツ遺跡第1次発掘調査報告」『北海道考古学』9：61-71
- 杉浦重信 1988『無頭川遺跡』富良野市文化財報告第4輯 富良野市教育委員会

- 杉浦重信 1989『西達布4遺跡』富良野市文化財報告5輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信 1992『無頭川遺跡Ⅱ』富良野市文化財報告8輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信 1996『無頭川遺跡Ⅲ』富良野市文化財報告10輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信・澤田 健 1998『南扇山遺跡』富良野市文化財報告13輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信・澤田 健 1999『無頭川遺跡：旧富良野工業高等学校地点Ⅰ』富良野市文化財報告14輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信・澤田 健 2000『無頭川遺跡：旧富良野工業高等学校地点Ⅱ』富良野市文化財報告16輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信・澤田 健 2002『無頭川遺跡：旧富良野工業高等学校地点Ⅲ』富良野市文化財報告18輯 富良野市教育委員会
- 杉浦重信・澤田 健 2003『南扇山遺跡Ⅱ』富良野市文化財報告19輯 富良野市教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1922『伊茶仁チシネ第1 壑穴群遺跡』標津町教育委員会
- 高橋 理 1996「余市式土器再考」『北海道考古学』32：49-62
- 高橋正勝 1972a「北海道における縄文時代中期の終末（1）」『北海道青年人類科学研究会会誌』9：49-58
- 高橋正勝 1972b「北海道における縄文時代中期の終末（2）」『北海道青年人類科学研究会会誌』10：59-64
- 高橋正勝 1981「北海道南部の土器」『縄文文化の研究4：縄文土器Ⅱ』雄山閣、10-20
- 高橋正勝 1982「萩ヶ岡式土器の設定」高橋正勝編『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書15 江別市教育委員会、229-235
- 高橋正勝編 1971『柏木川』北海道文化財保護協会
- 高橋正勝編 1982『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書15 江別市教育委員会
- 武田 修 1998「北海道常呂川河口遺跡出土の押型文土器について」『北方の考古学：野村崇先生還暦記念論集』野村崇先生還暦記念論集刊行会、149-161
- 武田 修編 1995『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修編 2000『常呂川河口遺跡（2）』常呂町教育委員会
- 種市幸生編 1985『礼文島幌泊段丘の遺跡群：東上泊・上泊3・上泊4遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書19 北海道埋蔵文化財センター
- 千葉英一・長沼 孝・熊谷仁志編 1991『余市町フゴッベ貝塚』北海道埋蔵文化財センター調査報告書72 北海道埋蔵文化財センター
- 苫小牧市教育委員会編 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ：苫小牧市静川1遺跡・厚真町厚真1・2・8・10遺跡発掘調査報告書』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 苫小牧市教育委員会編 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ 苫小牧市静川遺跡・柏原17遺跡発掘調査報告書』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 豊原熙司 1971「久著呂林道出土の北筒式土器」『釧路市立郷土博物館々報』210：102-103
- 豊原熙司 1974「住宅造成とトマンベツ遺跡の現状」『釧路市立郷土博物館々報』228：33-34
- 豊原熙司 1996「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』32：35-47
- 豊原熙司 2008「縄文中期」斜里町立知床博物館編『知床の考古』しれとこライブラリー9 斜里町・斜里町教育委員会、68-76
- 豊原熙司編 1979『茅沼遺跡群：釧路川中流域の遺跡』標茶町教育委員会
- 豊原熙司・涌坂周一 1981『植別川遺跡』羅臼町文化財報告6 羅臼町教育委員会
- 豊原熙司・涌坂周一 1985『チトライ川北岸遺跡』羅臼町文化財報告9 羅臼町教育委員会
- 豊原熙司・加藤春雄・坂井通子 2004『トマンベツ北遺跡第2地点発掘調査報告書：釧路川中流域』釧路川流域史研究会
- 豊原熙司・因幡勝雄・坂井通子 2005「網走川筋出土の羅臼式土器」『北方探究』7：21-33
- 豊原熙司・福士廣志・涌坂周一編 1983『開運町遺跡：釧路川中流域の遺跡』標茶町教育委員会
- 中村 齊・君 伊彦 1970『江別市大麻第V遺跡発掘調査報告書』江別市郷土史研究会・江別市教育委員会
- 中村 齊・松下 亘 1976『小島の沢遺跡：江別市第34号遺跡』江別市文化財調査報告書67 江別市教育委員会
- 名取武光 1939「北海道の土器」『人類学先史学講座』10：1-42
- 新美倫子 2019「北海道北部における縄文時代遺跡の分布について」白石浩之編『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流：研究の視点』六一書房、461-470
- 西田 茂編 1993『芽室町北明1遺跡（2）・音更町西昭和2遺跡・池田町十日川5遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書82 北海道埋蔵文化財センター
- 西本豊弘編 2000『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 野村 崇 1999「北からの道：シベリア・サハリン・千島列島と北海道」橋口尚武編『海を渡った縄文人』小学館、65-94
- 野村 崇・杉浦重信 1995「北限の縄文文化：千島列島における様相」『季刊考古学』50：62-69
- 長谷山隆博・阿部千春編 1990『エサンヌップ2遺跡・エサンヌップ3遺跡』門別町教育委員会
- 広田良成・阿部明義・山中文雄・笠原 興編 2019『根室市別当賀一番沢川遺跡発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター調査報告書355 北海道埋蔵文化財センター
- 福田正宏 2018「縄文文化の北方適応形態」『国立歴史民俗博物館研究報告』208：9-44
- 福田正宏・夏木大吾編 印刷中（2022）『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（Ⅲ）』東京大学常呂実習施設研究報告21 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設
- 福田正宏・萩野はな編 2020『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（Ⅰ）』東京大学常呂実習施設研究報告17 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設
- 福田正宏・高橋 健・高瀬克範・塚本浩司・佐藤昌俊・齋藤瑞穂・山口大介 2002「北海道日本海沿岸地域における考古学的調査」『利尻研究』21：93-130
- 藤本 強 1972「常呂川下流域を中心とした地域の一般調査と壑穴群の実測」『常呂』東京大学文学部、9-50
- 藤本 強 1977『岐阜第三遺跡』東京大学文学部
- 藤本 強 1979『北辺の遺跡』教育社
- 藤本 強 1980a「栄浦第二遺跡東端の貝塚」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部、153-159
- 藤本 強 1980b「モコト貝塚表面採集の土器」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部、161-169
- 藤本 強 1981「中期の土器北海道」『縄文土器大成2：中期』講談社、138-140

藤本 強・宇田川 洋編 1982『岐阜第二遺跡：1981 年度』北海道常呂町
 北海道教育委員会編 1978『美沢川流域の遺跡群』II 北海道教育委員会
 松下 亘 1965「北海道の土器に見られる突瘤文について」『物質文化』5：14-28
 松下 亘・石川辰也 1965「宗谷郡浜猿払遺跡」『北海道考古学』2：17-30
 松田 猛・石川 朗編 2001『釧路市大楽毛 1 遺跡調査報告書』I 釧路市埋蔵文化財調査センター
 松田 功・豊原熙司・坂井通子・村本周三編 2010『オライネコタン 3・オライネコタン 4 遺跡』斜里町文化財調査報告 31 斜里町教育委員会
 松田 功・村本周三・田代雄介編 2013『峰浜 8 線遺跡』斜里町文化財調査報告 35 斜里町教育委員会
 松谷純一・上屋真一編 1990『中島松 5 遺跡 B 地点・中島松 7 遺跡 C 地点』恵庭市発掘調査報告書 恵庭市教育委員会
 三浦正人・皆川洋一・広田良成編 2004『千歳市チブニー 2 遺跡(2)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 207 北海道埋蔵文化財センター
 村本周三 2009「北海道における縄文時代中期・後期の「平地住居跡」とその暦年代」『考古学研究』56(2)：44-61
 森 岬子 2006「北筒式土器について」『北方探究』8：1-24
 森 秀之 1984「包含層出土の押型文土器について」『楠遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 15 北海道埋蔵文化財センター, 196-199
 山谷文人 2012「港町 1 遺跡の調査」『利尻研究』31：39-53
 和田英昭・米村 衛 1988『ナヨロの沢・浜藻琴神社遺跡』網走市教育委員会
 Василевский А. А., Потапова Н. В. 2017 *Очерки истории Курильских островов*, Том 1, Министерство культуры Сахалинской области, ИАЭТ СО РАН, СахГУ: Южно-Сахалинск.
 Можаев А. В. 2018 Раскопки стоянки село Рыбаки 2 на острове Итуруп Курильского архипелага. *Археологические открытия. 2016 год*: 480-482.

図版出典

図 1～3・13・18 筆者作成
 図 4・5 1・4：豊原・涌坂 1985、2・3：駒井編 1963、5・12・15・17・18～20・23：工藤ほか編 2008、6：武田編 2000、7・8・13：松田・石川編 2001、9：小林編 1985、10・11：松田ほか編 2010、14：笠原ほか編 2019、16：松田ほか編 2013、21・22：森 2006、24・25：越田ほか編 1992
 図 6 1・2：佐藤ほか編 2012
 図 7 1～19：森 2006 を一部改変
 図 8 1～4：工藤ほか編 2008
 図 9 1：松田・石川編 2001 を一部改変、2：宇田川・熊本編 2001、3・4：越田・愛場編 2005、5～8：豊原編 1979、9：梶田・梶田 1992、10：武田編 1995 掲載資料を再実測・拓本作成、11・12：工藤ほか編 2008、13・14：武田編 2000 掲載資料を再実測・拓本作成、15：佐藤ほか編 2012、16：豊原ほか編 1983
 図 10 1～12：工藤ほか編 2008 を一部改変
 図 11 豊原ほか 2004
 図 12 広田ほか編 2019
 図 14 1～3：苫小牧市教育委員会編 2002、4：北海道教育委員会編 1978、5・6：高橋編 1982、7～12：千葉ほか編 1991、13・14：三浦ほか編 2004、15：佐川ほか編 2003、16・17：新屋・佐藤編 2002、18～20：松谷・上屋編 1990
 図 15 1・2・6・9：杉浦 1988、3・8・12・13：杉浦・澤田 1999、4・15：杉浦・澤田 1998、5：杉浦・澤田 2003、7：杉浦・澤田 2000、10・11：杉浦・澤田 2002、14、杉浦 1992
 図 16 1・2：佐川・皆川 1992、3：福田・萩野編 2020、4～6・8・9～13・16～20・23：福田・夏木編印刷中(2022)、7：佐藤・佐藤 1986、14：菅・飯田 1973、15：大場・菅 1977、21・22：松下・石川 1965
 図 17 1・9：岡田ほか編 1978、2・3：氏江ほか編 1980、4～8・12～22：西本編 2000、10・11：松下・石川 1965
 図 19 1～4：西田編 1993、5：荒生・高山編 1988、6：工藤ほか編 2008、7：小林編 1985、8：梶田・梶田 1992、9：和田・米村 1988、10・11：佐藤編 1993、12：越田ほか編 1992
 図 20 1～11：武田編 2000
 図 21 鬼柳ほか 1984
 図 22 1～11：佐川・皆川 1992 を一部改変

A Study on the Pottery of Hokuto Series

Hanna HAGINO

The Hokuto type is known as a pottery type of the Eastern Hokkaido (*Doto*) from the end of the Middle to the beginning of Late Jomon period. The main stream of the previous studies on the Hokuto type were subdivision and chronology based on the material from archaeological sites in the Eastern Hokkaido. Some similar potteries, however, are discovered also in the Central Hokkaido (*Doho*) and the Northern Hokkaido (*Dohoku*), and they cannot be overlooked to understand the actual state of the Hokuto type pottery. Therefore, it is required to make a breakaway from the discussion based on limited regional area, and shift to an argument about the extent and relationships of each pottery series in Hokkaido. Examining the characters of the subdivided groups classified in the Hokuto type pottery: Tokoro-6-*ru*i (group 6), Tokoro-5-*ru*i (group 5), Hosooka type, Rausu type, Marumatsu- I type and Marumatsu- II type, they could be placed in a same pottery tradition, “Hokuto (type) series.” The objective of this study is to discover the spatiotemporal extent of the Hokuto series (ca. 4780-3570 cal BP).

Reviewing the chronology of the Hokuto series in the Eastern Hokkaido, which have numerous findings, it was discovered that there were few regional differences among the series during the first half of the Hokuto series, however, in the latter half, it differentiated into two traditions which show regional difference. Also, examining the spatial extent of the Hokuto pottery series, the Tokoro-6-*ru*i were also discovered in the Central Hokkaido and the Northern Hokkaido, and the Tokoro-5-*ru*i, the Hosooka type, and the Rausu type were also discovered in the Northern Hokkaido. Based on these considerations, the Hokuto pottery series could be newly divided into four phases. Each phase corresponds to the following: Phase one; Tokoro-6-*ru*i, Phase two; Tokoro-5-*ru*i and Hosooka type, Phase three; Rausu type and Marumatsu- I type, and Phase four; Marumatsu- II type. Organizing the distribution of the sites in each phase, it is comprehensible that the range of the Hokuto series had gradually decreased from Phase one, which covered an extensive area in Hokkaido. Although the pottery of Hokuto series centered in the Eastern Hokkaido, it is difficult to consider the tradition from the Mokoto type pottery in this area. Conversely, the emergence of the Hokuto series could be explained by some groups of pottery in the Central Hokkaido and the Northern Hokkaido. The next stage of this study is to examine the relation between the Hokuto series and other pottery series such as the Yoichi series in the Central Hokkaido, which will demonstrate the placement of the Hokuto series in a chronological timeline of the entire Northeast Japan.